ろどすおぺれーたー　どくたー１０さい！！

奈音

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ぼくどくたー!!

１０さいで、ろどすにすかうとされた、てんさいしょうねん!!

――――――――――――プロフィール――――――――――――

コードネーム：ドクター

陣　　営：ロドス

性　　別：男

生誕　経験：１０１度（必要の都度）

生存　経験：１～２年

出　　身：派遣先による

目次

第1話　10さいのたんじょうび ―― 1
第2話　ろどす　1にちしゃちょう ―― 5
第3話　おじいちゃんと　2しゃめんだん ―― 11
第4話　3びきが　ふくしゅうの　ゆきがっせん!! ―― 19
第5話　ろどすへ　つながる　4つのじじょう ―― 30
第6話　それいけ！　5ケンジャー！ ―― 41
第7話　6ック!!!　クライマーズ!!!　その① ―― 53
第8話　6ック!!!　クライマーズ!!!　その② ―― 61
第9話　6ック!!!　クライマーズ!!!　その③ ―― 73

第1話　10さいのたんじょうび

「…それを舐めるのをやめなさい」
「なぜ？」
「あなたのやってることは間違いなく自殺行為よ。
　人間でなくとも睡眠も休憩もせずに生きていけるはずがないわ」
「しかし、ケルシー。
　結果は見ての通り、私は生きている。あなたという後ろ盾を得てね」
「そうせざるを得なくした悪党が何を言ってるの。
　あなたの舐めているそれは、いつから行っていることなのか聞いても？」
「勿論、物心がついた時からさ。それ以来寝てない。」
「……。
　睡眠が身体にもたらす効果はあなたに講義せずとも分かっていると思うけれども、
　何をそんなに急いでいるの？
　もうあなたを脅かす物はなくなったわ。文字通り。
　このロドスから出なければ、という条件が付くけれども」
「…ケルシーは甘いものは好きかな？」
「人並みには」
「そう、人には好き嫌いがある。そして人気があるものから品薄になっていく。
　やがて品切れになる。品切れになる前に準備を終わらせておくのが、今の私の研究内容さ」
「あなたの舐めているそれがそうだとでも？」
「これ？　これは違う、おそらく私以外は無理だろうね、死んでしまうよ」
「その話をしているのよ、とても正気だとは思えないわ」
「両親の狂気から生まれた私にとって、正気という言葉はとても恵まれた言葉に聞こえるな…

専属医師様のお言葉に従おう、私の寝床はどこかな？」
「こっちよ、付いてきなさい…。
……契約通り、最高の研究環境を用意したわ。貴方は試作品だけでも恐ろしい結果を出した。
そしてそこにはあなた自身の健康状態も含まれていることを忘れないで。
毎日８時間の睡眠をすること。いいわね？」
「うれしくて涙が出るね、いや本当に。くれぐれも後ろを振り向かないでくれケルシー。
私は人生で初めて死を恐れずに眠れることに感動しているんだ。
――涙の止め方を教えてもらっても？」
「……機械のようだ、と聞いていたけれど」
「誤解だよ誤解。なんなら今まさに顔をぐしゃぐしゃにして感動している私を見てくれ。
……どうかな？」
「凄い顔ね……。それはわざとやってるのかしら？」
「表情筋のことを言ってるなら正解だ。様々な文献を参考にしてみたから、
合っているといいんだが……。
しかし涙だけが本当に止まらないんだ、歩く気も失せてきた。手を引いてもらっても？」
「……意外とかわいいところもあるのね。ほら、手を出しなさい」
「あぁそれなんだが、全身が震えて動かなくなってきてね。どうにかして欲しい」
「ええ？　…え？　やめ、止めなさい。自律神経を制御なさい!!」
【――補助脳を起動します】
「…なんてこと」
若くして医者としての資格と、研究者としての権威を手にいれた子供が、常に手放さなかったものがある。黒い光沢を放つ、直方体のバックパック。それを説明するときに言われた言葉「培養した己の脳髄を持ち歩いている」

「本体は意識的に落ちてしまったようだ。おや。止めて欲しいな。
――化物をみるような目で見るのは。
出来れば貴女がまだ見たことも想像したこともないような別種族のたまたま言葉が通じる……
化物として接してほしい」
「貴方は化物なの？」
「そうだ。そしてこれからこの私を基にした素体を造る。私と同じような者を幾数も幾数も」
「契約の内容がそんなことだとは――待ちなさい、組織を円滑に動かす…生産に協力…量産品に関して口外してはならない…」
両親は高名な学者であった。
多分に漏れずその叡智と英知の結晶として生まれた私は、同年代の子供たちよりも多少、そう多少学習への意欲が高く、物心ついた時には両親と同じ学問への門戸を叩き、そして当然のように親子としての関係は崩壊した。
そうせざるを得なかった。
私が今、平気な顔をして嘗め回している飴は、咀嚼することは危険だ。触れることさえ危うい。
両親は聖餐と呼んでいた。私の短い両親との生はすべて聖餐と共にあった。彼ら――両親を叩きのめすことは生きていくうえで仕方のないこと。その狂気に満ちた実験の成果が、気が付かないはずがないのに。
研究者としては限りなく正しいが、人間として、一人の子供の親として。
この学術の世界から消したほうがいいだろうと冷酷に判断した私は、両親を監獄に追い立てた。
そうなるだろうと予測して取れる手段を全て取り、私は今ロドスアイランドという私が思いつく限りでの研究する環境としての最高権威の後ろ盾を得て、マスメディアと怒りの民衆様から逃げることにも成功した。
そんな私を見て、世話をして。

私の専属医師となったまだやさぐれてないケルシーとという医者が頭を抱えて唸っていた。
「その悪魔のような顔をやめなさい」
「ケルシー、貴女はもう少し冷酷になれるタイプかな？」
「場合によっては」
「なら言葉遣いから改めることだ。そして気にしないことだ」
ケルシーに先導されて入った、私専用の研究施設は不自然なほどに培養槽ばかりが並んでいた。
私は、そのうちの一つに私をセットし、そのまま本体をベッドに安置する。
出力先を機械音声に変更。
同一周波数検索・・・ 照合完了。空き培養槽全機起動、複製作業完了まで１３日。
併せて本体の肉体的衰弱完治のため、寝台型培養槽起動・・・ 完治まで１０日。
「残念だが本体の私は１０日ほど眠り姫だ」
「そう。それで素敵な貴方はいつ眠るのかしら？」
「なぜ？」
「契約通り、８時間寝るのよ。新種族でもね」
「私をそういう風に扱ってくれてとても感動したよ。
ありがたい専属医師のお言葉の通り、私も休眠状態に入るとしよう」
「えぇ、おやすみなさい。そして誕生日おめでとう」
「ありがとう、おやすみなさい」
ロドス医療オペレーター・・ドクター。
その名前以外失った１０歳の少年は、生まれて初めて安息の眠りを得た。
それは今まで生きてきた中で、とてもとても恵まれていて、とてもとても素晴らしい
誕生日プレゼントであった。

第2話　ろどす　1にちしゃちょう

「……はいもしもし。あら、ＣＥＯ？
どうしたのかしら、外回りで忙しいあなたがめずら……は？
謀反？乗っ取り？　ちょっとどうしたのよ落ち着いて……はぁ?!
ドクターと名乗る少年がすべて私の指示でやったと言ってるですって!!
ちょっと待ちなさい今どこにいるの今すぐ行く事情を説明させてお願いだからぁあああああああ……」

――数刻前。

自室で今後のための業務をこなしていたドクターの部屋にコール音が鳴り響く。
これは極めて珍しいことで、基本的に存在自体がロドスの中でも特級の秘匿事項であり、
同時に最大の政治的急所でもある彼の部屋に電話が鳴り響くことはまずない。
ここの存在を知っているもの、権限があるものは限られている。
いつまでも部屋に籠ってばかりのドクターを心配した専属医師のケルシーかその助手。
ロドス自体が危急の災難に見舞われ、保安部によって最優先で搬出すべき指定荷物として扱われる時。それぞれに対応した点滅光が煌々と部屋を照らすことで、作業に没頭しがちで周りの見えないドクターにも分かりやすいように出来ている。
医者なら白、危急なら赤。
しかし点灯する色は緑だ。
「はいもしもし。こちらドクター……ＣＥＯ？　ロドスの？
子供連れで行くから案内して欲しい??　私に？
……あえて聞くが、【私】なら誰でもいいのかね？　ダメ？

本体は出来るだけ動かしたくないんだが……ＣＥＯ命令だと…？
相分かった。しかし素顔を見ていいのは貴方だけだ。
情報保全のため、私はそれなりの格好をして貴方たちの饗応をさせていただくが…。
むしろそうじゃないと困る？」
しばらくの間、似たようななやり取りをしたドクターは、珍しいことにひどく焦燥した顔を形成するよう補助脳に命じた。そうこうしている間に通話は終わり、その間にも本体のドクターの脳と繋がった幾数ものドクターが全力で稼働する。
「学校で思い知らされたことがある……抜き打ちテストというやつだ…。
間違いない。
今まで受けた屈辱の中で、あれほどの苦渋を嘗めさせられた経験もない…。
というか学術に関してはともかく、対人に関して１０年の経験しかない…。
なら、なら……」
室内に轟音が絶えず鳴り響き始める。
「今は朝。ＣＥＯがロドスに到着するのは昼頃。ケルシーは往診中…だから私か。
そういえばケルシーは緊急性の高い非常事態が発生した時、私自身の判断で動けと言っていたな…。
ならば今すぐ、私一人で整えなければならない。私よ、そうだな？」
「機械化ｈｏｈｅｉ　搭載済ｎｏｕｚｕｉ、緊急製造分１個ｓｙｏｕｔａｉ（５０人）、整列完了」
「同じく学習用培養槽ＡＩ、緊急製造分１個ｓｙｏｕｔａｉ（５０人）、製造完了」
「緊急で作った即席品で多少のバグはあるが致し方ない、人間なんてそんなものだ!!
いいか私諸君！　昼にＣＥＯだ！ＣＥＯが来る！　契約上私は

彼の庇護下にあるとは言え、
　彼の機嫌を損ねればその瞬間、私の進退が決まると言っていいだろう!!
　ならばやるべきことは分かるな！　私よ！」
機械化歩兵は町中の人々に違和感を持たれないよう、
あるものはロドスの制服をきっかりと着込み、　あるものは服を着崩して若者風を装い、あるものはいかつく見えるよう整え、きっかり５０パターン分、子供から老人までの姿格好をしたドクターの群れが形成されていく。
　そこに培養槽内の脳髄が一体に一つ補助として、
　現在進行形で現代の老若男女の振る舞いを映画媒体／映像媒体／紙媒体で次々と読み込んでいっては、練習させていく。
「では解散！
　三々五々ＣＥＯの情報を集めつつ、持て成しの準備をしつつ、各部署に私を配置して、
　一片たりとも抜かりなく饗応するのだ!!」
「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」
「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」
「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」
「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」
「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」
「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」
「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」
「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」
「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」
「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」
「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」「了解」
「了解」

結論から言うと大いに失敗した。なぜだ……？
目の前では身を縮めて平謝りしているケルシーがいて、ＣＥＯがそこまで謝らなくていいと恐縮している。私はというと、私の饗応に大変満足していただいたＣＥＯの細君とそのご息女にいたく気に入られ、おもちゃにされていた。
「ねえしゃしょー」
「違いますご息女、わたしはドクターで」
「でも、ぱぱよりかいしゃに、くわしーよ？」
「だから違うのです、細君からもどうか説得を…え？　もう私が社長でいいんじゃない？」
「やっぱり、しゃしょーだ！」
「……勘弁してくれ」
いやよく見たら細君笑ってるが、眼が笑ってない。完全に獲物を見る目でみている。
くそっ、一体どうしたら正解だったんだ？　私は間違いなく、間違いを犯していないはずだ。
誰にも不審に思われないように広く薄く引き伸ばした私の情報網によって、ＣＥＯ一家の食事の好みは完全に把握した。だからこそ、食事にもお菓子にも飲み物にも、特段好みのものしかお出ししていない。まずここは問題ないはずだ。
加えて、私の本業は医者だ。
医者なら患者の立ち振る舞い、姿勢を見て疾患を抱えていることをすぐさま見抜けないようでは、
この歳でロドスに抱えてもらった意味がない。だからこそ、私は過去から現在に至るまでのＣＥＯ一家の習慣をすべて調べ上げ、視察に来た彼らに対して、健康に気を使ってほしいと、ロドス職員の協力を得て、ピンポイントにすべて指摘した。
勿論ロドス職員の協力は快く受け入れられた、むしろＣＥＯの相手をしてくれる私に感謝したほどだ。ここも間違っていない、むしろ完璧だ。
更に、施設の見学だけでは同伴した細君とご息女はお暇だろうこと

を加味して、
即興で芸人一座に弟子入りした数体が、食事の時も、見学の時も、小粋なジョーク……は常に滑っていたが、芸やマジックショーは受けていた。
だから私は、はしゃぎ過ぎたご息女が転倒して怪我をしないように気を遣っているだけでよかった。完璧だ。
文句のつけようがない。しかし結果はこの様だ。何が悪かったんだ…？　分からない…。
分からないまま、目前でケルシーは謝り続け、私はその時間いっぱいCEO母子におもちゃにされたままだった。

「――安心した、と言われたわ」
夕刻、ドクターの私室。腕組をするケルシー。
刑の執行を待つ重罪人のような面持ちで待ち構えていたドクターに掛けられた言葉は、羽毛布団のような柔らかさを持っていた。
「それは私の饗応に満足して頂けた、という意味ではない？」
「大失敗よ。怯えさせてどうするの」
「しかし何が悪かったのか分からない……何が悪かったのか教えてもらっても？」
「それは――他人から教えてもらうようなものでもないわね…。
怪我の功名と言っていいのかしら……せっかく造ったんだから、世間慣れしてきなさい」
「機密扱いの私が出ずに、脳髄が出張るというグレーゾーンは問題ないと？」
「あなたのことだから自動破棄プログラムぐらい備えさせているでしょう。
保全意識が末端まで行き届いてるから問題なしと判断しました。

これにはＣＥＯも同意しています、ただし条件が一つ」
「私の一体をＣＥＯ一家に常駐させること以外なら喜んで」
「分かってるならいいわ、じゃあそういうことだから。
……そういうことっていうのはね、ＣＥＯ命令ってことよ？」
「……分かった、わかりたくはないが分かった。ただ、最後に一つ教えてもらっても？」
「――あなたが１０歳だってことがよく分かったってことよ」
「それがなぜ安心できる要素になるのかを聞きたかったのだが…」
「もう少し貴方は、等身大の自分自身を知るべきだってこと。
これ以上言ってもわからないでしょうから、ＣＥＯ命令を速やかに遂行すること」
「……了解した」
部屋を出ていく間際に、ケルシーから頭部を「よしよし」と撫でられ「よく出来ました」と褒められたドクターは、「大失敗」と「よく出来ました」の意味の整合性が取れないまま、
機械化歩兵／世界旅行計画についての草案を練り始めた。
だからこそ。
ケルシーが、ドクターの今回の行動に関して、もう少し詰め寄るべきだった!!と考えるのはすべてが終わってから。「子供らしいところもあるのね」と、はな歌を奏でながら暢気している彼女が、【ドクター】の【責任者】であることに苦悩する日々が、すぐそこまで迫っていることを、まだ、知らない……。

第3話　おじいちゃんと　2しゃめんだん

顔面に鬼を模した仮面を付けた若造の噂がスラム街で広がっていた。単独で現れたその鬼がまず行ったのは、スラムマフィアの乗っ取りだった。力と金が支配するその世界で圧倒的な武力を示した鬼にはあらゆる攻撃が効かなかった。

いや効いてはいた――ときたま腕を切り落とされ、足を砕かれ、全身を穴だらけにされても、気にもせずにすぐさま治して突撃を繰り返しただけで。そうして、一月と経たず勢力図を塗り替えたその鬼は、なにをどうやったのか、民間企業と連携してスラムの住民に仕事を割り振り始めた。

だからこそ、スラムの一角で診療所を開く壮年の元に鬼が現れるのに、そう時間はかからなかった……。

――路地裏。

「うおおおおおおおおっ…!!!　ふっ――――――ざけんなぁ！
一撃の速度で二連撃入れてくるとか人間かてめぇ…っ!!」

ゴロゴロと地を這う音と、鉄材を切り裂く硬質な音階。

昼日中であっても、迷い込んだものを逃がさないという悪意に染められたスラムの一角で、最近話題の鬼仮面は追い詰められていた。この国に住んでいる者なら、その顔を見ただけで生まれたばかりの赤ん坊でも泣き止むと揶揄された存在。このスラムの中では誰もがその壮年の名前を呼ばず、だれもが口をそろえて、畏敬の念とともに【将軍】と呼び顕されるものに。

「……そういう貴様こそ。

体術の方は滅茶苦茶だが、よく視える眼を持っているようだな。

今のを避けられるとは思っていなかったぞ」

「そいつはどーも。だが同じ手は二度と俺には通用しねぇ。学習したぜ」

「……天賦の才というわけではないようだが、貴様のその学習速度は厄介だな。
私が一度出した体の動きをそこまでパターン化して想定出来るものか…？
貴様ほどの武の使い手が、師もなく、また、戦場に立ったこともないなどと
にわかには信じられん話だ」
「だーかーらー!!　俺は平和的に話し合いに来ただけって言ってるだろうが!!!!」
「……果たしてそうか？　貴様の言動は胡乱なところが多すぎる。
この診療所の存在も、私が面倒を見ている娘のことも、そして――
――っ!!!!」
斬る、弾く、斬る斬る、いなす避ける弾く。
斬る、合わせる、斬る斬る、合わせる合わせる反撃。
「……わずか数合。
私は武器で、貴様が素手であるのにも関わらず。
反撃できる余裕すら生まれるとは一体どういうことだ？」
「言ったろ、同じ攻撃は通用しねぇって」
そんな簡単な話ではない。目前で滅茶苦茶な構えをとって相対している鬼仮面の戦闘技術はあらゆる意味でちぐはぐだ。今まで取らなかった筋肉の動きを見せるとき、鬼仮面の視線は必ずそこに集中する。だから、視線の動きにも、緩急織り交ぜたフェイントにも簡単に引っかかる。だというのに、必ず対応してくる。よほど全身の筋肉に自信があるのか、人体の稼働限界に挑むような回避のされ方をする。その割に体力を消耗している様子もない。なんだこいつは。私は何と戦っているのだ。本当に人間かこいつは。そしてどちらからの刺客だ？
「……貴様。どこで造られた化物だ」
「ようやくお話しする気になってくれたってことでいいかい？
…いいや違うか、最初に言ったことなーんも信じてくれてね――もんなー。

分かったわぁぁあかった。あんたが分かってくれないってことが分かった。
だからさ、最終手段を取らせてもらうわ…」
初めてそこで目前の鬼仮面は構えらしきものをとり、腹に強く力を入れたように思えた。
よく見ると、両手を口の両脇に持ってきて、今から叫びますと言わんばかりだ。
なんだ？といぶかしむ。
純粋な声量を武器にする戦士は過去幾つもいた。総じて接近戦が長じて接戦になった時に、相手の体勢を崩すときなどに使われる戦法で、こんな遠間の間合いでわざわざ大げさに構えをとるようなものでもない。なにを――。

「ネオンちゃああああああああああああああああん!!!
おじいちゃんが虐めるよぉおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!!」

「――――は？」

後日。――感染者診療所アザゼル。
高価なお茶請けが用意され、高級な茶葉を診療所の主が手づから淹

れた。
　思いつく限りこの場での最高級の持て成しが鬼仮面に饗されていた。
「――いやぁ、悪いねぇ。こんなに歓待してもらっちゃって」
　一方、その持て成しの準備をした壮年の機嫌はちょっと過去の経験を思い出しても比較できないほど最降下していた。
「……警戒が先に来て、斬りかかったのはこちらに非礼がある。当然のことだ」
　当然のことだと言いながら、鬼仮面の対面で茶をすする壮年の手はプルプルと震えていた。
　…聞けば、そもそも鬼仮面がスラムマフィアをどうこうしたという話の起点は、
　　壮年が目に入れても痛くないくらい大事にしている娘から始まったのだという。
　鬼仮面が娘の友人を助け、その友人を助けたことで目を付けられ、二人に請われてどんどん人助けをしているうちに結果的にすべてのスラムマフィアに喧嘩を売る羽目になったのだという。そしてネオンと鬼仮面は別れ際、たわいもない約束をしたのだという。
　それは、すべてが終わった後でも献身的にスラム住民の医療的ケアを行う鬼仮面にネオンから言い出したことで。「あなたが困ってたら、今度は私があなたを助ける！」というなんとも微笑ましいもので…いやその結果「おじいちゃん大嫌い！」と言われたのだが。精神的ダメージがとても深い。嫌いじゃなくて大嫌いだぞ、私はこれからどうやって生きていけばいいんだ……？分からない、分からないぞ。ここまで絶望の深い自問自答も過去類をみないのではないのか…？
「あー。その、なんていうか。大丈夫かよ」
「……大事ない。それで、なんだったか」
「この度、あんたらが住んでるスラムの頭になった…あー。オルグだ。よろしくしてくれ。将軍さま」
「私の自己紹介は必要ないようだな」
「そりゃ。この国にいて、あんたのことを知らない奴を探す方が大変

だ。
ーーそれで、俺が持ってきた話は受けてくれる気にはなったかい？」
ことわーーと言いかけて、背後からの視線に気がつく。
その視線はじっとりとしていて、ギラギラとしていて、あらゆることを責め立てているように感じ取れるものだった。……壮年の鋭敏な聴覚は不幸なことにも、その部屋の隅から感じられる視線の主のボソボソとした小さい呟きを明瞭に捉えてしまう。世界が終わる音がする。その音色は到底ではないが、受け入れられるものではなかった。
「ことわーーろうと思っていたが、気が変わった。
オルグのお節介を、感染者診療所アザゼルは受け入れる」
「そうかそうか!!　いやぁ、ここまでした甲斐があったってもんだぜ」
「……ネオンがあそこまで懐いているのだ。悪漢ではなかろう、というのもある。
しかし、解せないことがある。オルグよ、君はいったいなんだ？」
「ーー化物さ。あんたの言った通りのな」
「……それは、先ほどから茶菓子に一口も口をつけようとしないことと、
関係していると考えても？」
「ーーそうだな。俺に口はねえ、鼻も、耳も、眼も。なにもないのさ」
そう言って、オルグは顔面を完全に覆うように装着していた鬼仮面を取り外す。
そこにあったのは無だった。いや、なにもないわけではなく。ただ、明確に人間でないことを示す冷たい鈍色の光沢が広がっていて。まるで、内部にある貴重品を守るかのような、容器を思わせる外観をしていて。そこまで観察してようやく。脊髄に液化窒素を流し込まれたかのような戦慄が、直感を伴って稲妻のように走り抜けた。
「ーーん？　あぁ、ネオンちゃんは知ってるぜ。まだ戦い慣れてない頃は負傷がひどくてよ。
顔面が剥き出しになっちまったことが一回だけあってな、めちゃめ

ちゃ怒られちまった」
いい娘さんだな、と。明日の天気は曇りじゃないかという程度の気軽さで、軽々に。
「……中身は」
「ん？」
「……中に。何が、入っている…？」
鈍色の球体が表情もないのに、ニヤリ。と笑った気さえした。
それほどに、オルグは自然体だった。まるで、これが。生まれた時から当たり前のような雰囲気を伴って。鈍色の球体に手を掛ける。

「……俺はこいつを見せるとき必ず質問するんだがな。　なぁ、将軍様よ。

おれはなんだとおもう？」

光。黄色の、いや黄金の、よく知る色だった。夏の花に、世界を照らす陽のように、都市を動かす水のように。分かってはいた、そうじゃなんじゃないかという確信はあった。軍の機密実験体が脱走して暴走したのかとさえ思っていた。警戒していた、隠れ住む場所が狙い撃ちされるかのように改善されていく姿に。笑顔を取り戻していく子供たちに、安堵さえ抱いていた。住みよくなればなるほど、安堵

を得て、同時に警戒心は積みあがっていった。否定して欲しかった。目を背けたかった。
「……なぜ生きている」
絞り出すように喉から出た声は枯れていた。
「生きている。そうかい。生きているのかと問うてくれるか、うれしいね」
鬼仮面は元の様相に戻っていた。
「生きていると自覚した時からこうなんだ。
だから俺が生き甲斐を感じるときってのは、生きているやつが幸せそうにしていることさ」
「……生まれてから何年経った」
「一年も経ってないぜ」
「……まだ稚児も同然ではないか」
「俺もそう思うんだが、知識と年齢意識の高さはあってな、１０歳だ」
「……なんということだ」
頭を抱え、もはや熟考も疑いも必要のないことだと判じた。
声、所作、それらすべてに欺瞞の欠片もない。そんな有様であっても真っすぐに生きてきた人間の姿がはっきりと見える。
「……先程、オルグの支援を受けると言ったが。条件をつけさせてもらう」
「将軍のところで毎日診察を受けないといけないという話以外なら喜んで」
「加えて、オルグには鍛錬を付ける。スラムの頭なのだろう？
万が一にでも、その頭を縦に真っ二つにされたらどうするつもりだ？」
「将軍以外無理じゃね？」
「――分かったか、クソガキ？」
「……オーケー、オーケー。分かったからその手を柄から離してくれ、流石にそれは死ぬわ」

――感染者診療所アザゼル。
そこは壮年の男性と少女が営む感染者のための施設だった。
しかし、ある日からそこを取り巻く環境は一変した。
表社会の弱みを握る男が、裏社会に新たに君臨し、統治し始めたのだ。
そうして時が経ち、その都市に運命の時が訪れるまで、アザゼルは都市住民に多大な影響を及ぼしていくことになる…。

第４話　３びきが　ふくしゅうの　ゆきがっせん!!

防寒具を全身を覆うように着込み、全身の輪郭が全く分からなくなったずんぐりむっくりとした巨人が、吹雪のまっただ中で腰かけていた。まるで暖房の温かみが全身に届いているかのような寒さをものともしない自然体で、何かを待つようにじっと吹雪の先を見つめている。

――突如、轟音。　遠く離れたここまでも爆炎が見える。

全身に雷のように轟音の衝撃が響こうとも、巨人はまるでそれが脚本に書かれた予定調和でしかないような様子でじっとしている。

やがて、明らかに人間ではない四足歩行の猟犬の群れが、全速力でソリを曳いて巨人の下へ向かってきていることを視認してから、ようやくその重い腰を上げた。巨人は猟犬の群れの中にいるリーダー犬に向けて言葉を発した。

「――状況は」

「流れ者の言葉を氏族が信じるかよ、予想通り、何もかも吹っ飛んだ」

「……忠告はしたはずなんだがな」

「だからこそ、というのもある。信頼関係を築く時間がなかったのも痛かったが」

「済んだことを嘆くのはよそう。生き残りは？」

「頭首夫妻とその筆頭護衛が、

私たちの体を使って前頭首とその護衛を治してくれと言って息を引き取ったところだ」

「――今からか？　もう間に合わんだろう」

「ところがどっこい、なんと生きてる。虫の息だが」

「――ならば行こう。医者の時間だ」

その後、幾ばくかの時間、巨人と猟犬は情報の整合性を取り合い、爆心地に急行した。

――爆心地。　美しく装飾された家具や陶器が散乱し、見るも無残な残骸になり果てている。
　爆発の余波は建造物の基礎となる柱や屋根を無差別に破壊し、ふとした衝撃でバランスが崩れれば、建物自体がいつ倒壊してもおかしくないように思える。
　そこに、一匹と一人が、その見た目とは裏腹に、慎重にしかし迅速に踏み込む。
　爆発の成果を確認しに来た慮外者を、縛り上げてはソリに括り付け。犬たちに所定の場所へ運ばせることをしばし繰り返した後ではあったが。前頭首とその護衛の顔を見知っている猟犬が、鼻を引くつかせ、崩壊した建造物内を巧みに誘導していく。
「この方と、この方だ。間違いない」
「……確かにまだ心臓は動いている、虫の息だが。
　頭首夫妻とその護衛の死体はそこか、気候に感謝だな。他の国ではこうはいくまい」
「どうにかなりそうか？　ヘリオトロープ」
「そのための私だ、ランタナ」
「……しかしここは場所が悪い、死体を確認しに来た慮外者に邪魔される可能性もある。
　ソリが戻り次第、場所を移した方がいいだろう」
「――言っている間に来たようだな、私は緊急救命で暫く手が離せない、行けるか？」
「誰にものを言ってる？」
「……要らない心配だった、頼りにしてるぞ」
「任せろ」
　炎と煤が充満する空間で、ヘリオトロープと呼ばれた巨漢は術式にかかる。
　何処から取り出したのか、患者を清めるために水を使い、消毒し、簡易手術を行うための空間的余剰を造り上げ、腕を１０個に増やした。
「……この特殊個体は全力稼働するときにリソースがかかりすぎるの

が難点だな。
頭も、眼も。それだけ必要になる
しかし参った、今回は二人だけか……まぁ、なんとかしよう」
神話の世界の大蜘蛛のような外見になった巨人は、犬の個体もそういえば特殊個体の一つだったなと、複数の脳のリソースの片隅で、くだらないことを言ったと韜晦しながら、全力で、適確に、複腕のすべてを稼働させ始めた。

――数刻後。

最初に目に入ったのはボロボロに倒壊した天井だった。
目が覚めた時には全てが終わっていた。いや、終わらされた、という方が正しいか。
爆発で何もかも吹き飛ばされた空間で、この老いぼれと、その護衛だけが息をしていた。
それぞれの息子と娘は、まるで爆風から庇うかのように覆いかぶさっていたと語られ、一瞬で血が頭に上り、またそのまま倒れた。語ってくれた誰かを確認するほどの体力が回復しておらず、しかしこの老いぼれの護衛の声だけははっきりと聞こえた。
「――あなたが治療を？」
「いかにも、獅子の守り人よ。あなたたちだけ、助かった」
「……まずは感謝を。しかし、我らの子の死体が。
……損壊している理由如何によっては容赦できません」

「願われた」
「――馬鹿な……次代を担う者こそ大事なれと言い聞かせているはずです」
「願われた。それだけで、私に断る理由はなかったのだ。獅子の守り人よ」
「なら……!!!!　ならなぜ!!!!
　我らの子らに……輪郭以外残っていないのか答えろぉおおお!!!!」
「願われた、そして私にはそれを出来るだけの技術があった。だからそうした。
　あなたたちの体の中に、あなたたちの子らの息遣いを感じるはずだ。
　たまたま血液型が同じでよかった。全て使う羽目になるとは思っていなかったが」
「そんな……そんな……。今は、……今は。此処をすぐにでも離れるべきです。
　我らには必ず成し遂げなければならないことが出来た。お付き合い願えますか？」
「医者には患者の怪我の経過を見守る義務があるのだ、獅子の守り人よ。
　加えて、深い心の外傷を癒すのにも時間がかかる。それまでは、付き合おう――」
　そうして、白い雪が何もかも覆いつくす銀世界を。溶かし尽くすほどの血が流れる、復讐劇が始まった。仇の首を、娘息子――我が子らの墓前に供えるまで、魂から流れ続ける流血を止めるために。我らの魂を慰めるために――。

――二日後。某所。
次に目が覚めたのは、いざという時のために確保しておいたセーフハウスの一室だった。
ふと隣を見ると、ずんぐりむっくりがいた。いや怖いわ。何で室内で防寒着厚めに着込んでるんだ…？しかもすぐ視線に気が付いたのか体調を確認された。
てきぱきと診察が終わり「ではこれを」と水と錠剤を渡され、助けておいて殺されることもないだろうとあっさり飲む。そしていろいろな話をした。いろいろだ。もちろん気を失う前の話も問い詰めた。だが、儂はそれほど腹は立たなかった。
これをしでかした下手人共をどのような目に遭わせてやろうかということで目の前が真っ赤に染まったからだ。今度は意識を失うことがなかった。ずんぐりむっくりによると、そうなると思ったから抑制剤を飲ませたのだと言われる。用意のいい奴だ。
一息ついたところで、三人で車座になって話し合った。気絶した後の話を聞いた。
儂は気絶していて、その護衛は儂を抱えて逃げるのにいっぱいいっぱい。
現場検証やら、周囲の状況やら、下手人の手がかりやら、たまに襲い掛かってくる慮外者への対処やらを全部このずんぐりむっくりとそいつの飼ってる猟犬が対処したのだという。そして、トカゲのしっぽまではつかむことが出来たのだという。
それを聞いて勢い込む儂に――
「すでに、隣の部屋にズタ袋をかぶせている状態だ。偉大なる銀色の獅子よ」
「なにぃ…？」
「さぁ、あなたも治療の時間だ。

ズタ袋共の外傷を癒すための道具は揃えている、私は患者を治療しよう。
――あなたの心が癒されるまで。
なにせ、生きている間は私の患者だ」
「え、こいつこっわ。おい儂の元筆頭護衛、こわいこわいこいつこわいって」
「――すでに拷問は何時間かしたのですが。
この方すぐに治してしまって、幾らでも拷問が出来てしまいまして……。
すでに情報は洗いざらい聞いているのですが、せっかくですから殺しますか?」
「おっ、そうだなっ!」
折角だから殺した。ていうか儂らのほうが普段から怖いことしてることを一瞬忘れるほどずんぐりむっくりは迫力があった。本人は医者だと名乗っているが、間違いなく嘘だとわかる。今までの経緯やら、屋敷にあった謎の投書文のことを聞かされて得心の行く部分もあった。しかし、どこかちぐはぐだ。まるで隠しきれていない。
普通に考えて、諜報ができて、戦闘が出来て、医療技術が卓越していて、鉄火場の検証から犯人を吊し上げるまでこなせるって、どこのぞ国の特殊諜報員ですよと宣言しているようなものだ。よほど戦の臭いの強い師の下で鍛えられたのだろう。その割にわきが甘いが。
素性に深入りするのは避けた方がいいのかと思ったが、あっさりと「ヘリオトロープという」名乗った「医者だ」だから絶対嘘だろ。
「それよりも、そこのズタ袋が持っていたデータの中にこんな画像があった。
偉大なる銀色の獅子よ、心当たりは?」
そうして見せられた情報媒体の画像の中には、銀色獅子の血統の子供たちが映っていた。

――数時間後。廃ビル屋上。
「……おまえさぁ、ほんとおまえらさぁ。なんなの？」
「医者だ、偉大なる銀色の獅子よ」
「お前のような医者がいてたまるか」
「……寡聞にして聞いたことがありませんね」
復讐者一行は、首尾よく孫たちが閉じ込められている高層ビルを拝める位置まで来ていた。
こそこそと隠れ潜みながら、三人は高層ビル内の音声と映像データをハッキングしていた。
そこまでの機材の用意はこのヘリオなんとかという巨人のものだが、それを所定箇所に設置したのは猟犬の方だ。この猟犬も何かおかしい。碌に吼えないのもそうだが、聞き分けがよすぎる上に人語を解している素振りを隠そうともしない。動物特有の筋肉のしなやかさで、あそこまで音も立てずに曲芸師も真っ青の動きを一流の諜報員のようにこなす。
この一人と一匹はいろいろとおかしい。お陰で助かってはいるのだが。
「偉大なる銀色の獅子よ」
「……いや待て待て待て、その偉大なる銀色の獅子ってのはなんなんだ。
聞き返すのも面倒で突っ込みもしなかったけどよ、いい加減名前で呼んでくれや」
「――ヴィクトリアで、貴方の論文を読んだ。私はそれにとても感銘を受けたのだ。
そんな方法があったのかと」
「……ま、待て待て待て待てまてぇぃぃぃ。おまっ、いつの話を…。

この老いぼれの若気の至り黒歴史をほじくり返すとか、お前俺を殺す気か…？」
「――元気な上に、まだまだ若いではないですか」
「その精神年齢低いですねみたいな煽り止めろぶち殺すぞ元筆頭」
「それが出来るならどんなにいいだろう、そう思って。この論文を書いた人間に一目会いたくて、
私はここまで来たのだ。
――まさか治療中にそれその人だと、気が付くとは一生の不覚…!!
だから。だから、私は。私はとても怒っているのだ。偉大なる銀色の獅子よ。
このような偉大な思想を持つ血統が、滅ぼされようとしていることが、我慢ならない…!!」
感情の熱を込めた発言をしたかと思えば、解析が終わった。と、そう冷静に続けると、銀色獅子の血統が閉じ込められているフロアの詳細な地図と、見張りの配置が画面上に記される。
「偉大なる銀色の獅子よ。
――貴方の着想は、間違いなくこの世界から流れる血をなくすために向かっているものだ」
「……儂の孫が頭首になって、ようやくスタートラインに立てるって言ってもか？」
「遠大な計画に、時間だけは味方だ」
「……元筆頭」
「――よろしいので？」
「よろしいもなにも、幹部は軒並み吹き飛んだ。儂もお前も死んでなきゃおかしい……。
明らかにおかしな状況を、まともにしてくれた奴が一番儂に狂ってやがる。
こいつを逃がすのは、ねぇだろうよ」
「ではそのように」
雪に覆われた高層ビルの中身が血に染まるまで、いくばくの時間もかからなかった。

――数日後。三氏族会議を控えたカランド貿易　本邸。
「――私は今深刻な悩みを抱えている、偉大なる銀色の獅子よ」
「…あぁ？」
「――おかしい、おかしくないか？　私の本職は医者なのだ、医者とは患者を見るものだ。
偉大なる銀色の獅子よ。それに当てはめると貴方はもはや患者ではない。
つまり私の仕事は終わりだ。
要するに帰っていいか？　偉大なる銀色の獅子よ」
「イタタタタッタタタタッタタタァァァァァァ!!!
あー腹の傷が開いたぁ！　あー痛いなー、動き回ったらまた傷口が開くだろうしなー!!
誰か助けてくんねぇかなぁあああ!!!!」
「――そうやって、私をいつまで付き合わせるつもりだ。偉大なる銀色の獅子よ」
「……有能さを示されたのが、運の尽きかと思われますが」
「――おお。私の患者2号の獅子の守り人よ、私は嘆かわしい。
私はちょっと他人より耳がよくて、手が広く、武勇もそれなりにこなせて、
医療技術に長けているだけの……そう。ただの医者なのに」
「お前のような医者がいてたまるか」
「……寡聞にして聞いたことがありませんね」

「――嘆かわしい。私はとても嘆かわしい……これだから北方地方の引篭もり室内猫共は。
冷たい大気と乾いた吹雪に脳髄の芯まで凍らされて、家から出れなくなってしまったのだな」
「はぁあああぁ?! 出れるっつーの!!
ケガしなかったらあいつらぶっ飛ばして出る予定だったんですぅぅぅぅぅうーーー!
はいろんぱぁ!!!」
「――獅子の守り人よ。仕える主、間違えてないか?」
「……違うんです、死んだと思ってたら復讐できる機会が手に入ってしまって。
テンションが壊れているだけなんです…。いつもは雄大で静謐な主なんです……」
「――矮小で騒音そのものにしか見えないのだが、獅子の守り人よ。
先見の明がありすぎて、暗殺を実行されたあたり、
やはりこれが偉大なる銀色の獅子の本性なのではないのかと私は思うのだ、獅子の守り人よ」
「……（サッ――――）」
「先祖代々、
ウチの家系の護衛やってる一族の元筆頭が眼ェ逸らすの止めろよなぁあああああ!!!」
年齢不詳のその男は、ヘリオトロープと名乗った。
全身を分厚い防寒具で包み、一見、巨漢にも見える体のそのほとんどは医療物資で占められていて、どこまでが体なのか不明だ。ずんぐりむっくりとした見た目。見るからに鈍重そうな、深く足跡を残すその体重。しかし、彼は誰よりも機敏だ。そして彼と常にともにある、猟犬とそれに率いられる群れは、吹雪の中でこそ、恐ろしい脅威を発揮する。
「しかしよぉ、ヘリオ。あそこまでする必要あったか?」
「だが効果的だ、偉大なる銀色の獅子よ」
「――我々はギャングではないのですが……」

だからこそ。敵対したと確信が取れなかった2氏族の屋敷にも、誰にも気づかれずに忍び込める。わざわざ綺麗にしてやった首なし死体を置いてくることも容易で。今頃大通りは、カランドの国教の象徴ともいえる存在に突き刺さったオブジェに騒然としていることだろう。

「――ま。息子や娘は残念だったが、しばらくこれで時間稼ぎができるだろう」

「……暫くの間。犯人捜しで国境も封鎖されるでしょうし。

後継者たちを育てる時間ができましたね」

「何？　待て。国境線が封鎖？　どういうことだ？　偉大なる銀色の獅子よ」

「――余所者のお前が真っ先に断頭台に連れていかれるから、

バレないようになかよくしようなぁぁあああああ、ってことだ間抜けぇぇぇぇ?!!」

「くっ……獅子の守り人よ。嵌めたな？」

「なんのことでしょうか？

私はただ、貴方たちほど隠密に長けているのなら2氏族の屋敷に忍び込むのも容易でしょうねと

世間話を振ったり、あの巨大な象徴にバレないように細工をするなんて、

まさか貴方たちでも不可能ですよね、と他愛もない話をしただけじゃありませんか？」

老獪な氏族の手練手管に、戦慄で身を震わせる、室内であるのにもかかわらず防寒具を厚く着込んだ巨人、ヘリオトロープの横で、一匹の猟犬は「だから止めとけって言ったのになぁ」と言わんばかりのあきれた表情でくぅわわわわおおおん、と大きなあくびをした。

第5話　ろどすへ　つながる　4つのじじょう

――とある都市。路地裏、夜が日に日に伸びていった頃。

「――いつまでついてくるつもりなんですか？　トカゲ君」
「返事がありませんね、もしかしてご自分は特別な存在だと思っていらっしゃる？
　若者にありがちな万能感は今のうちに卒業しておくことをお勧めしますよ」
「目線であなたを確実に追っていることが腑に落ちませんか？
　種族特有の身体的特殊技能なのでしょうか。
　どうにもそこだけに頼りすぎているように見受けられる」
「――だから見えていますってば、そうやって目の前でまじまじと見つめられても困ります。
　と言いますか、隠れる気あります？
　視線はバレバレ、物陰に体を隠す気もない、なんでしょうか？
　わたくし、バカにされてます？」
「……あんたを、ここ最近のあんたを。ずっと見ていた」
「――ようやく口を利いてくれましたね。熱烈なファンとは。サインはいりますか？」
「……あぁ、あんたが恐ろしすぎて目が離せなくなってね。
　――最近ファンになったところさ。
　……あんたは何故そうしていられる？　あんたはおかしい。狂ってる」
「こんなに奉仕精神にあふれた紳士になんていいようなんでしょう。
　寝ずに働いているというのに……」
「そうだな。文字通り寝ずに働いてるな、あんた。
　救世主様には悪いが、こんなところで暮らしていると、無償の善意なんてものが、
　いつ悪意になって牙をむくんじゃねぇかと気になって仕方がねぇんだ。

悪いとは思ったが、仲間と一緒にあんたのことは見張らせてもらってたぜ」
「――ということは、どうやら。
わたくしの潔白は君の行いによって証明されたようで。安心しました」
「余計に怪しいぜ、あんた。
というか種族は何なんだ？　そんな強靭なやつぁ、アビサル以外噂にも聞いたことがねぇ。
あの毒娘を囲っていることも怪しい、これ見よがしにあの夫妻に協力してるのも怪しい。
あとあのおっかねぇ黒猫はなんなんだ。
こんな肥溜めに、あんたらみたいなまっとうな奴らが、何の用で入り込みやがる…!!」
「なるほど、つまり貴方はわたくしと行動を共にしたいのですね？
よろしい！」
「はっ？　ちがっ――」
「――ちがうのですか？」
「い、いやまぁ、最終的には？
そう言おうと思ってたけどよ……そんな友好的じゃねぇっていうかよ」
「では行きましょう、さぁ行きましょう。いやぁ助かりました。
猫の手も借りたいくらいで。やはり限界があるので。
トカゲ君には前々から目を付けていまして。
仲間になってくれるのなら私の相棒の護衛役をやってほしかったので助かりました」
「待て待て待て待て。仲間になるつもりはねぇし、勝手に仕事やらせようとするんじゃねぇよ」
「――これは異なことを。
わたくしのことを知りたいのでしょう？
ならば、わたくし以外の人物からわたくしのことを聞くべきでは？
わたくしに近しい人物と仲良くなり、わたくしの経歴を聞き出すべ

きでは？
　まずそのために、
トカゲ君はわたくしに近しい人間の信用と信頼を勝ち取らなくてはなりません。
つまり、おうちに招待です。さぁ行きましょう。すぐ行きましょう。
そろそろだと思って食材は買い足してあるのですよ」
「……かっ――」
「蚊？」
「――帰ｒ」
「残念です。わたくしの作る料理は絶品だと、みなから評価を受けておりまして。
特に、ハダカウロコトカゲの後ろ足をキノコと香辛料で味付けして焼いたものが今日の主賓で――」
「……ろうかと思ったが、うん。せっかくの食事のお誘いを蹴るのも失礼だし、
お邪魔させていただこうかなぁ…？」
「おお、これは喜ばしい。では行きましょう、さぁ行きましょう、今すぐ行きましょう」
「――クッソ、絶対化けの皮を剥いでやる……！」

その後。イーサンと名乗ったトカゲ男は、同じくラバテラと名乗る小柄な白衣の男について回って仕事を始めた。そうしてやはり思った。ラバテラはおかしい。いやというかそいつについて行ってる一団全員がなんかおかしいと。
ある日のこと。拠点にしている家屋の庭にて。本日はお休みの日なので、彼女のガス抜きに付き合ってあげる日なのですよ。と食卓の

席でなかなか旨い紅茶を淹れながら言うもんだから、適当に相槌を打ちながら何も考えずについて行った。そして後悔した。
「――狡い！ずるいずるいずるいずるいずるい!!!
ラバテラって全身武器みたいなもんじゃん！」
「己の肉体を十全に扱えないものが、
わたくしに物申すなど10年は早いですね、生まれ治してきては？」
「くっっそ!!!　ぜっっっったいに、吠え面掻かせてやる!!!」
「――はーっはっはっはっは！鈍い鈍い！亀より鈍い！
御伽噺のように己の肉体的ポテンシャルにばかり頼ってるからそうなる！
怠ける！　慢心する！
恵まれた肉体で可能性を探求しましたか？　なに？　していない?!
これはいけませんねぇ、今回もわたくしに負けたら〝出来るまで映画の刑〟です」
「いっ……いやだ！　それだけはいや！
ラバテラじゃないんだから、出来るまで頑張るとか正気じゃないよ！
っていうかストーリー部分も見せてよ！
延々とアクションシーンばっかりだと死にそうになるのよ!-」
「――と言いつつ、前回見て覚えていただいた動きは全部できているようですね!!
……しかぁぁぁああああっしっ！　足元が疎か！　視界が狭い！
センスに頼りすぎて努力を怠る功夫！　甘い甘い甘い!!!」
「いっ……いやぁあああああああああああああああああああああああ!!!　いや！いやよ!!
もう薄暗い部屋に毎日ご飯を持ってきてもらう日々は嫌なの!!!
お外に出たい!!
意識が朦朧としている時にブルーケーキを口に突っ込まれると全身に怖気が走るのよ!!

――おいしいけど!!!　」
「彼女の作る料理は成分表上は何も問題ないとしっかりと、
確認してある栄養素豊富な食事ですので!!
ここで負けたら勿論ケーキも食べてもらいます!!!」
「ひっ」
「隙あり」
「あっ」
「一本ですね、さぁでは部屋に」
「……さんぼんしょうぶ!!!」
「ふむ」
「まだいっぽんめだから！　これさんぼんしょうぶだから!!!!
一本でも取れたらわたしの勝ちでいいんでしょ!!
まだわたしの意気はくじけていないわよっ…!!!」
「――はっはっはっは。
肉の躰さえ十全に扱えない赤ん坊が？
ハイハイを始めて褒めてくれるのは、親御さんだけなんですよ？」
「――殺すわ」
「出来たことがありましたか？」
街中に出ればそれなりに声を掛けられるような美少女を、いい大人が言葉と拳でボッコボコにしていた。ていうかラバテラだった。ドン引きどころじゃなかった。ちょっと同じ家に住んでる人だと思われたくなくて、一通りの寸劇が終わったところで、家の中に引き返した。
ちょっと落ち着いて淹れてもらった紅茶でも飲もう、と思いキッチンの方に向かうと人の気配。いやな予感がしたので、気配も姿も消して紅茶の方に向かうと、いやな予感の原因が、案の定いた。
「いえ、分かるんです、わたくしは物分かりのいい女でしてよ。
ええ、ええ。見捨てないことを信条とするお人の掌は限られていて、
わたくしと同じように、困っている方を見過ごせないというのは承知しています。

――承知していますとも。
でもでも、釣り上げた魚に餌を与えないというか。
植物に水やりや肥料を与えるのを忘れがちというか。
期待させておいてプレゼント箱の中身がクマの縫いぐるみだったというか。
――いえ、クマちゃんはとても嬉しかったので大事に飾ってあるのです。
しかしですね……」
その特徴的なピンク髪を隠すようにフードを被った少女の、嘆きの語りが止まらない。
そしてそれに付き合わされている、この家の家主の娘である少女は、完全に眼が死んでいた。
庭から聞こえる騒音が、拳が肉を殴りつける鈍い音から、金属同士が競り合う硬質なものに変わったことを確認するとイーサンは巻き込まれないようにそそくさとその場を後にしようとして、家主の娘に腕を掴まれた。
「――逃がさないわよ……っ!!」
「くっ……! ラバテラに習った隠形は完璧だったはず?!」
「その横着な性格を直した方がいいって言われたのをお忘れかしら?
紅茶の入ったカップが宙空に浮いてるのよっ……っ!!」
定期的にピンク髪少女が狂いだすのは、そもそもの原因として、その保護者であるラバテラという男が、最近知り合った感染者治療を志す一家と懇意になり、あっという間に意気投合してしまって、一家の父親と一緒にスラムに突撃するように出かけるようになってしまったことにある。寝床も食べ物も必要な二人はふらりと帰っては来るのだが、死んだように寝て、一言二言言葉を交わしたかと思うと、頭をなでなでしてから出かけてしまう。
そうしてそうなると、どうなるのか。全部被害がその一家の娘である私にくるのだ。
嘆いているのかのろけているのか。その境界線がもはや分からないこの頭の中まで総ピンク色天然色になっている、最近友人になって

しまった（友人になってしまった!!）この子は定期的に発作のようにこうなる。「良ければこの子と仲良くしてやってくれ」「仲良くして待ってるんだぞ」と言い含められていたから頑張って頑張った結果、何とか仲良くなったが、重い、重すぎるのよ…。

これならまだ庭で棒切れを振り回している狂暴黒猫のほうが…いや駄目だ、あの子もあの子で光り輝くように狂ってる。「感染者の権利は、感染者自身の手で取り戻す！」と宗教の開祖のようなことを血に染まった棒きれを持ちながら言うのは止めて欲しい。いや分かる、分かるのよ。その棒切れに付いた血が私たちを暴徒から守るために仕方なく付いたものなのは分かる。私も母も父も何度も助けてもらってる。わかる、分かるんだけどさぁ…。こうなんていうか頭での理解は追いついてるんだけれども、心が追い付かないっていうか、冷静に考えてわたしと大して歳の変わらない子がムービースターも真っ青の活劇を繰り広げるのに現実味が持てないというか。お願いだからこれ以上私の常識を壊すのを止めて欲しい。

――極めつけはあの小柄な白衣の気狂いだ。

なんで、あの人、私たちの命の恩人なんだろう……。過去のことに思いを馳せ始めると、瞳から生気が抜けていくのが手に取るように分かってしまう。いや過去どころか、もう現在進行形で頭を抱えたい気分にすらなる。なんで。どうして。わたくし電波受信してます、みたいな人が私たちのリーダーなの…？　いやこれは比喩でもなんでもなく本人が事あるごとに呟くことで、隠そうともしないのだ。いや、結果的に、その謎の行動や言動に意味はあって、実際その時になってみるとあぁそういうことかと納得できるものばかりではあるのだけれども、慣れてる連中と違って私は毎回毎回気が気でない。脳味噌ピンク色も凶暴黒猫もあぁいつものことかみたいな納得した顔してないでちょっとは突っ込んでほしい。

よって。あなたは違うわ！違うわよね！と完全に常識人突込み枠に収まってしまった娘の嘆きは、スプラッターホラーに出てくる、新たな同胞（犠牲者）を求める屍人のように力強く、イーサンの腕をつ

かんで決して放そうとしない。
「いっ、いやだ！　どうせ、こいつの作るケーキよりも泥甘な話を１０回以上は聞かされるんだ！
　おっ、俺はもう嫌だ！　こんなところにいられるか!!　部屋に帰らせてもらう！」
「逃がさないといったでしょう……っ！　はいお注射」
「ちょっ」
「ピンク髪とラバテラ監修の特別性よ。
　本来は無力化だけの為に造られたものらしいんだけれども、知ったことじゃないわね。
　さぁ、荒ぶる神を鎮めるのを手伝いなさい。今晩のご飯をマーブル模様にしたくなければね」
「い、いやだっ、あの話を聞くと全身が痒くなるんだっ……！
　いつも通りなんとかしてやれよっ！」
「人間には限界があるのよイーサン。
　どうせ今日は庭の騒音で誰も彼も怖がって何もできやしないんだから、
　暇つぶしだと思ってあきらめて頂戴」
「……というか、おまえさんはなんで大人しく椅子に座ってるんだ？」
「……実験ってね、必要なのよ」
「ん？」
「試薬が出来たから、
　効果時間が何時間ほどなのか試してみましょうそうしましょうって話になってね。
　――私、気付いたらこうなってたわ」
「嵌められてんじゃねぇか!!!」
「うるさいわね、これから貴方も同じ目に遭うのよ」
「俺、関係なくねぇ……？」

「――どんなことがあろうと決して見捨てない。それを信条としています。
だから、きみがもしよければ、わたくしの手をとっていただけないでしょうか…？」
白衣を血に染めた小柄な男は、そう言って手を差し伸べた。
それが、どんなに嬉しいことか。どんなに難しいことか知った私は。
亡者が天から差し出されたか細い糸に、安易に触れるような真似は出来なかった。
「……わっ、わたくしの手を取る。その意味が、貴方にはわかっていまして？」
「えぇ、えぇ。わたくし、研究には自信がありまして。分かっていますとも」
「沢山の人に追い回されますわ」
「駆けっこは得意なんです」
「それは知っています……。その、その……っ！」
たまらなくなって、わたくしはその手を力いっぱい握りしめた。
「――はっ、離せなくなっても、しりませんわよ！」

数時間後、眼をハートマークに輝かせて物語を語るピンク髪の少女の横で二名の犠牲者が死んだ眼をしている姿を、ラバテラは気絶した凶暴黒猫を、部屋で寝かせるために肩に担ぎつつ確認した。
その眠りの中で彼女は回想する。
文字通り、決死で戦った男の背中を。
腕も足も撃ち抜かれて、動けなくなったはずの男が、全身から雷電を奔らせ、無理やり駆動させる化外の雄姿を。背中にはさきほど患者を助けるために使った、蘇生術式で使ったＡＥＤをいくつも背負い、神経系を雷電としていた。
「――これは本当の本当の緊急手段でして。ええ、ええ。私が燃え尽きるまで間もない」
「ですがわたくしは心打たれたのです。
たとえ無力でも、己の魂の自由を、なお叫ぶことのできる貴女に」
「やはりわたくしは世界をもっと知らなければならない。
貴女のような、予想もできないセカイにめぐり合うために…っ！」
――閃光。稲光。いなづま。雷電。
夢の中だからか、想像上のものだからか、その時意識を失ってしまって、気が付いた時には背負われていた私にはその時のことが分からないはずなのに、はっきりと見えた。雷電を完全に制御して、敵対するものたちを両の鉄腕で薙ぎ払う、私が目指すべき極致が――。
「――我ながら、使い捨てとは分かっていても、意外と長持ちするもの

です」
なにか、聞き捨てならない言葉を、発達した聴覚が拾い、一瞬で脳髄が覚醒する。
「……活動資金も最近増えたことですし、おそらく間に合うでしょう。
――わたくしの活動限界が来る前に、辿り着かなくては」
「……。」

その後、すんだもんだ遭った末に、辿り着いて、
最終的に覚悟を決めてお別れの挨拶まで考えていた狂暴黒猫が、ネタを明かされて本人に殴り掛かったのは言うまでもない。

第6話　それいけ！　5ケンジャー！

とある都市。大きさとしては中規模程の研究棟、それに隣接したとある店舗内にて。グラジオラスと名乗っている男が、雇っている社員の本日の業務報告を聞くために椅子に腰掛けていた。夕方頃にようやくフィールドワークから帰ってきた鉱石狂いと、研究棟に缶詰めになっていた箱入りお嬢から報告を受けるためだ。

「――腹減った、なんか飯はないか？」

「……僕の家は食堂じゃないんだが？」

いや開口一番お前の腹の具合の報告はいいんだよ業務報告しろ業務報告。――と思いつつも仕方がないので飯を作ってやる。……社員のモチベーションを上げるためには社長自らが動かねばならない。僕は勝手知ったる我が家のあちこちから、夕飯になりそうなものを見繕って適当に栄養が付きそうなものを出してやった。それを唖然として見ていた箱入りお嬢がおずおずと言いづらそうに苦言を挟んでくる。

「……あ、あのね？　グラ君。ここ私の店なんだけどね？」

「――え？　身売り寸前だったクソ経営の箱入りお嬢様がなんだって？」

「――ちっ、違う違う！　身売りじゃない！　身売りじゃないよ？　あくまでもあれは親切なおじさんがね？」

「さすが、臓器を担保に取られる契約を交わしそうになる程、判断力が腐ってたお嬢は言うことが違うな。おまえは性善説の説法師か」

「うううう……」

うーうー唸る箱入りお嬢を懲らしめた辺りで、一心不乱に飯をむさぼってた鉱石狂いが、ひとごこち付いたのか、片手に持ったスプーンをびしっと僕に突きつけると、キメ顔で言った。

「今の話を聞いていて思ったんだが。

私ならお前が持ってるくらいの鉱石を条件にチラつかされたら……。

いやしかし……いや、アリだな」
「ねーよこの鉱石狂いが。おまえのオツムの面倒見させてたモフ娘はどうした」
こいつは放っておくと感動で脳がやられたのか、源石で脳がやられてるのか知らないが、平気な顔をして病気の症状を侵攻させるための危ない行動をとりまくろうとする。拾い上げて社員に仕立て上げたまではよかったが、監督役がいないと今日も帰ってこなかった可能性が高い。大人しく飯を食ってることからモフ娘はちゃんと面倒を見てくれたようだが…。
「今晩の夕飯を狩ってくると言って、入り口で別れた。
明日だと少し危ないから今のうちに確保したいらしい」
「――電波か」
「こらっ、グラ君。そんないい方しちゃだめでしょ？」
「分かった分かった、僕が悪かった。それで？」
「……その電波だが。しかし彼女のような存在が語る電波は当たるからな。
私も明日のライフワークは控えようと思う。」
「お前のライフワークは間違いなく、お前自身のライフを削ってるわけなんだが。
まぁいい、明日出かけないなら一日僕と健康診断だ。
病状を促進する資源を要求したのは僕だが、多すぎるわ。――研究は捗るが。
いい加減にしないと寝台に縛り付けるぞ」
すごんで見せると、ちょっといやそうな顔をされたが、
スプーンを咥えながらうんうん頷いているから納得はしているようだ。
「もぅ、グラ君ったら乱暴なんだから。ほら二人とも席についてお茶でも飲みましょう？
いい茶葉が手に入ったのよ？」
「……ラナの淹れる茶は心が落ち着くから私は好きだな。いただこう」

「僕は別に……分かった、分かったから！
泣きそうな顔をしてじっと見つめるのはやめてくれ！」
「うふふ」
「――くっそ、僕は雇い主なんだぞ」
「……オーナーはいつもそれで負けてるな。いい加減学習しないのか？」
「……僕がこの箱入りを助けた時に、似たようなやり取りをして本当に泣かれたんだよ」
「グラ君。乙女の恥を晒すなんてひどいわ、しくしくしく」
「泣かせたな」
「いやどう見てもウソ泣きだろ。両手で顔覆ってるだけだし」
「いーけないんだーいけないんだー。
モフモフが帰ってきたらこのド畜生オーナーを一緒に吊し上げようなー、ラナ」
「ほどほどにね」
「――おかしい。おかしくないか？
なぜ、そろいもそろって雇い主の僕に尊敬の念がないんだ……？」
腕を組んで本格的に嘆き始めた、優秀な経営者であり、彼女たちの社長でもあるグラジオラスを見て、雇われの二人は思う。尊敬はしてるし感謝もしているが、面と向かって真面目にそれを言うと恥ずかしいのと調子に乗られるのとがあるので絶対に言ってはやらないだけなのである。
「……まぁ、いい。世間からの僕への評価は揺るぎない。
本日の業務報告を聞こうか」
「グラ君が持ち込んできた仕事は順調よ。
寧ろ何処からこんな需要を思いつくのか知りたいと取引先が首を傾げていたわ。
……お陰様で私はまたしばらく研究棟から出れそうにないのだけれど」
「恨みがましい眼で僕を見るんじゃない。君の本望だろうに」
「……ええそうよ？　そうなんだけれども……。

でももうちょっと手心というか、業務的空白が欲しいかなって思いました」
「あー。分かった人員の募集を掛けておく……そうじゃない？
ええい！　物欲しげな目をして袖を引っ張られてもよく分からんぞ！」
「……もう！　報告が終わったから研究棟に戻ります！」
「おいちょっ――行ってしまった」
「……オーナーは一度死んだほうがいいんじゃないのか？
もしくは乙女心を勉強した方がいい」
「――乙女心だって？
僕は男だぞ？　どうやって勉強すればいいんだそんなの？
あぁもう、業務に影響が出るといけないから後でご機嫌伺いにでもいくさ。
それで、採取結果はどうだったんだ？」
「……オーナーの言う通り、過去に私の具合が悪くなった鉱石ばかり採ってきた。
これが仕事じゃなければ、わたしのコレクションに加えたいほどの貴重なものばかりだ。
これをどうするつもりなんだ？」
「モフ娘もそうだが、一定の基準を超えたプロフェッショナルの勘は替えの利かないものだ。
これなんか一見ただの石ころに見えるが、そうじゃないんだろう？
鉱石レーダーみたいなやつがいてくれるだけで、研究の進捗状況は変動するものだ」
「私は鉱石なら何でもいいんだが」
「おっ、そうだな」
「……やはりオーナーは鉱石に対する畏敬の念が足りないんじゃないか？
いいか？　鉱石一つでその大地の歴史が推察できる。
地層に積み重なる順番でどういう生物が棲息していたか、
どういうサイクルでその大地が息づいていたかをだな……」

「分かった、分かったから。僕が悪かったからその辺で勘弁してくれ」
「……分かったなら私の話に付き合え」
「据わった眼で見つめるんじゃない。
分かった分かった、社員のモチベーション向上のためだ……」
その後、大地と鉱石と地質の移り変わりとそこに息づく生命の偉大なる話を１０以上聞く羽目になったが、いずれも学術的見地と本人のフィールドワークから齎された内容であったことから、全くの無駄な時間でもなかった。余りにも長く、そして濃い内容であったので、何度も何度も「おまえは大地の精霊の化身かなにかか」と罵ったが、当人は喜んでいた。いやそりゃそうか、喜ぶわ。専門分野だもんな。一通り、熱く語りつくして語り疲れたのか「ラナのところに顔を出してくる」といって研究棟に吸い込まれていった。
「……はぁーーーーー」
「……お疲れだねぇ～」
先ほどから視界の端にチラチラ見えていたが、ようやく出てくる気になったらしい。僕はこいつと話していると毎回思うことなんだが、なんとかしてその尻尾を掃除用具に仕立ててやりたいという衝動がある。僕のような存在が衝動というのも変な話だが。
「見ていたんなら助けてくれてもいいだろう。僕は雇い主なんだぞ……」
「僕はさっき帰ってきたところなのさ！　ささっ！」
「……頭隠して尻隠さずという諺を知っているか？
僕が大地の精霊にとっつかまってる最中に、
たびたび、おまえさんのバカでかいしっぽが見え隠れしていたぞ」
「……部屋備え付けのモップじゃないかな？　そうだと思うよぉー」
「最近の掃除用具は聞き耳を立てながら毛繕いもできるらしいな。
その片手に持ってる妙に柄の長いブラッシング用の刷毛はなんだ？　ええ？
いますぐ掃除用具に仕立ててやろうか？」
「あ、あはははは…。　やめてよ？　本当にやめてよね！　にじり寄って来ないで！

……そっ、その掃除用具で思い出したんだけれど！
ほんとーに彼女たちをあそこに行かせる気なの？」
「……ちっ、いつかその尻尾毟って箒にしてやるからな。
――おまえの勘はなんといってるんだ？」
「まだ間に合うと思うよ！」
「なら、間に合ううちに行かせる」
「でもさー、やっぱり危ないよ？
あんな所に研究所を構えてる人にとってはそれでも価値があるのかもしれないけれど。
……やりたいことは分かるんだけれども、運が悪いと全員燃えちゃうよ？」
「だが、聞く限りでは明らかに予報にない時期にもそれは起こり続けている。
そしてそれでも尚、その夫婦がその場所を離れないということは、何かを掴んでいるということだ。
それがなにかは分からんが、とにもかくにも優秀な研究畑の人間の損失は世界の損失だ」
「……つまり？」
「降水確率が低いなら予定通りピクニックだ」
「引率役の先生は？」
「僕は経営専門、その手合いの人材スカウト部門はあいつの仕事だ」
「……刺されるよ？　ううう、僕も自分で言ってて怖くなってきた。
可愛い子が多いのが分かってても、
あの集まりに近寄るとしっぽの震えが止まらなくなるんだけど」
「そういうのは僕じゃなくてラナに言え。
それに、そういうのはラナが何とかしてくれているようだ……。
――なぜか僕も呼ばれることが多いが。
とにかく、ラナからのＯＫサインが出ている以上、予定通り行う」
「……はいはい、じゃああの発明家さん達によろしくね。
当日はあのギャグみたいな乗り物で行くんでしょ？
予報士としては一応ついていかないといけないからさー。

――ところで、要求した機材なんだけど、あれってさ……本当にちゃんと動く、んだよね？」
「……相当な金を積んで造らせたんだ、動いてくれないと困る。
それに、二人ともに今回の成果物はそのまま渡す契約で働いてもらってるからな。
恐らく問題ないだろう……。
まったく、この時ばかりは金と地位を持っていてよかったと思うな、ははっ」
「わぁ！　うざいかも！」
「……おまえさぁ……ほんとおまえだけじゃないんだけどさぁ……。
ぼく、やといぬし。おまえ、やとわれ」
「あああ、両手で顔面覆いだしちゃった。
……えっと。じゃあ、その雇われの天才発明家たちは言うこと聞いてくれるの？」
「……まぁ。うん」
「あっ」
「――聞いてくれます」
「そっ、そうだね！」
一瞬にしてオーナーの纏う空気が冷え冷えとしたものに変化したのを察知したのか、突っ込んだ本人はそそくさと撤退の準備に入る。とうとう頭を抱え込んで「あーそうだったそうだった、全部終わったら打ち合わせの準備しないといけないんだった」と言いつつ、こちらに向けて手首のスナップと残像。泡を食って慌てて受け止めると……いぬ？　手乗り犬？
「……あー。要求されてた機材の工場試作品だ」
「……犬？」
「――製作者にミーボ君と呼べと言われてる機械……カワウソだ。
僕は有能な科学者の機嫌は損ねたくないから、そう呼ぶように」

「……ええ？」

三日後。たった二人の天才科学者たちの為に操業が始まった工場にて。

オーナーと呼ばれている彼女たちの経営責任者は、今すぐラナのところに戻って飲めもしないお茶を飲みたい気分で一杯だった。――というのも。この場所に来てしまうといつまで経っても学習が終わらないのだ。

「やったよ！　とうとうラボ・ルトラが完成したよーーーーー!!」

あぁ……。

「設備の調整があとちょっとで……よし！

アップデート完了！システムの反応速度がこれまでの倍になったよ！」

あぁあああぁぁぁぁあ……。やめてくれ……お願いだから止めてくれ。

業務の都合上、僕は他の個体と比べて精神抑制制御部が緩く設計されてるから、設計されてるからぁ……。

【僕たち】の最大の強み。眠ることも休むこともなく、情報を自動的に刻み込んでいけるということ。宇宙の広がりのように情報を蒐集していくだけの部位。情報を仕分ける部位。情報の学習及び実践する部位は、全部【本部】。金銭をひたすら稼ぐための部位……は【貿易商】が殆どやっていて、【人材蒐集】はそれを元手にあちこちで手を広げなければならない。

――とはいってもそこまで手のかかるものでもない。

永遠契約を交わし終わっている人材の専門分野は、そいつ主導で量産ラインに乗せてやればいい。

だがこの二人は違う。

設備投資金額と積み重ねてきた研究背景がこの二人に頼りきりだから、それ以上の発展を望め……発展し続けてるな。なんでだ？

「グーちゃん、グーちゃん！　見て見て！　汎用型多機能式試作機１号だよ！

これはね！　これはね！

高温、高圧の環境下で長時間稼働が可能なレーザー照射型の測量装置で誤差を５ｍｍ未満まで抑えた優れもので！今後は極北の極限的な自然状況の中での活動を視野に入れた同型で３～４タイプのＤＤＦシリーズを――――――」

「今度の作戦で使う移動型研究拠点！　ラボ・ルトラにもそれは搭載済み！

え？　どう見ても巨大なミーボ君にしか見えない？　ノンノン！

外装に惑わされちゃいけないよ！グーグーの要望に合わせて居住性も完璧！　感染リスクを極限まで減らすための構想も織り込み済み。もちろん、感染者治療区画、感染者及び危険鉱物収容区画、研究区画に、居住区画と――――――」

あっ、駄目だわ、この二人のどちらか一人でもいなくなった瞬間、あっという間に発展が終了するわ。そもそも、そもそもそもこの二人との契約の最終段階は、〝人生を掛けた夢への成就〟の協力を

することなので、そのうち最先端技術の象徴のような企業に推薦してやる必要もあるのだ。つまり、準備が終わるまでの腰掛というか。腰掛というか……？　んんん？腰掛の段階で特許が取れそうな発明がどちらも試作品とはいえ完成してるのはなんで？いや、そうじゃない。仕事をしなければ――。

「――あーはいはい。そうねそうね。なるほどなるほど。それでそれで？

分かる分かる。へ？　いやそっちの話も聞こえてるから。僕に同時に話してくれて全然問題ないまだ処理能力の範疇。適当に聞いてないだろ？　両手が別々に動いてる上にお前らから聞いてること全部書き出してる。はいはいなるほどなるほど……」

死ぬほどきつい。いや死んでも交換すればいいだけなんだけど、死ぬほど辛い。実際、少し前、熱暴走で何度か死んだ。だから研究成果を聞き取るときはすべての個体に予定を開けてもらった上で、もしもの時のフォロー個体に常駐してもらう必要がある。なんせ最先端技術ヲタクが全力ノンストップで自分の喋りたいことだけ喋るから、分からない箇所はその場で聞かずに調べながら聞いて、だけれども、疑問が解決しないまま猛スピードで話が進むうちに不明ワードが両脇同時に累積していくもんだから、普通は無理。

だからこそ、この二人の場所に来るとき、全個体併せて処理能力の９０％以上が持っていかれることが前提で対処している。お陰様で指先の操作性と、情報の取捨選択能力だけは全個体随一になってしまった上に、こうやって現実逃避をすることもできる。

……はい、終わり。いやもう疲れた、もういや、部屋に戻って休みたい。でも今ので分かった必要な部品を生産ラインに乗せないともう間に合わない…試作品から部品の縮尺は見れば測れるから、型さえ作れば間に合うか…？

「グーーーーちゃん！」

「――重い。年頃の淑女が無防備に男の背中にのしかかるのは止めなさい」

「重くないよ！　それに、どうせすぐ作業にかかっちゃうんでしょ？

疲れたからあたしこのまま寝るーー！」
「……おいミーボ狂い。お前の同僚。
徹夜明けで妙なテンションになってるみたいだから寝台に連れて行ってくれ」
「ガウッ！　ガウガウッ――！」
「……いや僕が言うのもなんだけど、休めよ。
なんで噛付くんだよ、研究終わっただろ。
邪魔しなかったどころか最高の環境用意しただろうよ、僕」
「ガウガウガウウウッーー！　グーグーが悪い！」
「なんでだよ！」
「……あー。聞いた傍からすぐ理解して。
その上で、必要部品造り始めてるグーちゃんはおかしいって言いたいんだよ！」
「……それのどこに不都合があるんだ？」
「グーグーはひどい！」
「なにもひどくないだろ！」
「……分かる、分かるよー！
二人して徹夜に徹夜を重ねて協議した浪漫の塊みたいな技術の結晶を、その場で話しただけで理解されちゃう感じ！私たちのあの研究と試行錯誤の日々は何だったんだー……ってなるよー！」
「腕組んで、うんうん頷きながら言われてもな……分かった分かった。
僕は今度からもっと時間をかけて理解すればいいんだな？」
「グーグーのその態度！　それはそれでむかつく！」
「おまえたちは僕に何を求めているんだ……？」
「……とりあえずなんか悔しいから、あたしはこのままグーちゃんの作業見ながら寝まーす！」
「ガウッ！　ガウガウッ――！」
「いや寝るなよ。あと噛付くのをやめろ」

――そうやって、グラジオラスという個体は何処に行っても
「あれ？　僕って社長なんだが…社長？　社長の僕が一番働いてるのは何故だ…？」と自問自答しつつ、鉱石病研究者を集める傍らで、日の目が出る出ないに関わらず、優秀な人間を積極的に発掘していく人材派遣会社としての側面を持った店舗展開を世界中に広げていくことになる……。

第7話　6ック!!!　クライマーズ!!!　その①

細胞分裂は、同じ細胞を複製するために行われる、生物としての新陳代謝機能としての一部である。しかしその複製がうまくいかなかったり、全く違うものが出来上がったりする。これを突然変異という。いわゆる生物としての亜種であり、凶暴であったり元の細胞を攻撃したりと、非常に迷惑な存在である。

つまり、ネモフィラと名付けられたこのおいら。おいらは突然変異である。

とても迷惑なんだろうなーという理由として、おいらは他の連中のように、本体のために働こうと思わないし、働きたいとも思わない。しいて言えばずっと遊んでいたい。そしてそういうことバレたら面倒くさいなーとも思ったので、すぐさま本体に申告すると。

「そういうのもアリだな」

ありなのか。

あっさりと話が終わってしまったが、興味深い現象らしく、おいらは【貿易商】が出てくるまで本部に据え置かれた。その間は本当にずーーーーっと遊んでいた。世界旅行したいなーと思っていたので地図と歴史を見ながら現地のポートレートを眺めたり、地図と地形図をを穴が開くほど覚えて、あそこに行ったらああしたい、ここに行ったらこうしたいみたいなことばかり考えていた。しかしそうした時間にはやはりというか終わりがやってきて、別個体が『将軍』から学んだ体術剣術棒術槍術戦術戦略を詰め込まれ「世界旅行アーツの旅」が開催されることになった。

「世界旅行アーツの旅」とは――。

ＣＥＯ一家で、現在進行形でおもちゃにされている本体による、おいらの廃棄計画である。

現在アーツ勉強中のウサギ耳の幼女による、制御がうまくいかなくてちょっとどっちに飛ぶのか分からないハラハラなアーツの旅。企画を立ち上げたはいいものの、たまに暴発して壁に穴をあけたり、本体がもろに食らってたりしているが、本当に趣旨通りに進むのかこの

旅。
「――やっと加減が出来るようになってきたんです！」
「私の青痣だらけの体を見てそれだけ言えるなら上等だ。
今度こそ狙った場所に中ててもらおうか」
ネモフィラが見ている画面に旅の企画元の二人が登場し、
――意気込む兎耳幼女、今日こそドクターを吹き飛ばさずに済むのか!!――というテロップがテレビ番組のように流れる。これただのアーツ訓練の体裁してるだけでは…？と最近のバラエティ事情に詳しいネモフィラは訝しんだが、進行はつつがなく進む。
「――じゃ、じゃじゃん！　ヴィクトリアです！」
「……今日は壁が壊れずに済んだな」
「――えいっ！」
「ちょ」
そういうことになった。

おいら――というよりおいらたちは相当便利だ。
〝やる気がないのなら図書館や資料館を探してひたすら資料を読み込みなさい〟という指示を受けて、やることといったら、専門的な資料を開きながら、娯楽の産物である漫画・童話・活劇・映画をひたすら楽しむという、おいらが持つ、性能や処理能力を理解していない人間が見たら目を疑うような光景。
端から見て、真面目に勉学を行っている人間からすると喧嘩を売ってるのかという生活を始めてからしばらくして。
やはりというかなんというか、そういった態度に腹を据えかねたいかにも私お嬢様ですという人から絡まれてしまったが、今まで読んでいた文献をページと行指定してもらっても全部暗唱できると返すと、奇妙な暗唱合戦が始まり、全部勝った。

「――嘘……」
「気が済んだならおいらは映画に戻りたいんだけんども…」
先程から休憩中の他個体が「続きはまだか！」とせっついてくるので切実に戻りたい。
しかし話を聞いていないのか、耳に入っていないのか。お嬢様がおいらが持っている二冊の本にジロリと目線をやる。子供向けの童話と、専門家でも難しい源石の最新の研究成果が掲載されているサイエンス記事。
これに加えて、世界的に有名な俳優が活躍する（この俳優本人が行うスタントシーンが戦闘技術にとても役立つのだという）映画を見ているというおいら。
――キッ！と音がしそうなほど強く睨みつけられて、少しひるむ。
「失礼、お時間はあるかしら？」
「いや映画を」
「お・じ・か・ん・は、あるかしら？」
「……映画見ながらでもいいなら」
「それで構いません」
その後、本当に映画を見ながら二つの本を同時に読んでいるおいらに、そのお嬢様は質問しっぱなしだった。映画に集中したいおいらはだいぶうんざりしたが、処理能力の範疇だったので、ノートを広げて持論を展開するお嬢様に色々とアドバイスをした。
おいらたちにとってそれは既知の範疇の知識でしかなかったが、お嬢様にとってはそうでもなかったらしく、鉱石病患者の実態と世界各国での扱いの違いや、その治療法の現在地、診療所の有無、実際の治療現場での声などを教えてあげるととても喜んでいた。最初は敵対視されていたのが、どんどん同好の士を見つけた！みたいな温かみのある目線になっていき、しまいには尊敬の眼差しに変わっていった。
「連絡先を」
「だども、おいらは世界回ってるからなぁ…名刺ならあるだよ」
「ぜひ」
ただ、ヴィクトリアにいる間は、頻繁に大学図書館等に入り浸って

いる旨を伝えると、それから毎日ひっつかれるようになり、しまいには連絡を付ける方法を確立されてしまった。
頻繁に保有している知識を開帳するような日々が続き、そしてとうとう出国する日取りが近づいてきた時、脳領域への通信があった。
「誰でもいいから仲間になりたそうな目で見ているのを連れてきなさい」
どこか投げやりな口調で達せられる指令。
「……ゲームしてるんだか？」
「アーツ暴投姫の世話……遊び相手かな？
私は攻略本替わりじゃないんだが……とにかく。
処理能力の閾値は限界まで上げておくから、
次のアーツの旅開始までに準備を完了させておいてくれ。
時間になったらクロージャ謹製の悪ノリモンスターマシンが勝手に動き出す。
条件が達成できなければ、
私は空っぽの機械を拝むことになるが…そうならないことを願っている」
「心にもないことを、いうもんではないがや」
「そうだな。じゃあこう言い換えよう。私はどちらの結果になっても構わない。
ネモフィラ。君にはなにも期待していない。
そこで野垂れ死にさせないのは、ヒューマンリソースの無駄使いだからという理由だ。
ドッグタグだけにならないだけの有能さを示してくれることを望んでいる」
「支援は？」
「さっき言ったとおりだ。
私はたとえ君があからさまに捨て駒であっても、全力を尽くす。幸運を祈る」
脳領域への通信が切れ、ネモフィラは出発前に告げられた言葉を思い出す。

「補充を受けずに生存できるのは半年足らず」という話を、旅立つ前に告げられたのはこの時の為であったのか。
そうして、いつも通りに過ごして、いつも通りやる気が起きず、遊ぶ気しか起きず、時間は過ぎ。幸運は訪れないまま、出発の一時間前を切った。

悪ノリモンスターマシンのエンジン音が鳴り響く。
残り３０分を切ったところで、勝手にクロージャマシンは起動した。――遠くから爆発音が聞こえる。行き先を示すハンドル上の画面には〝搭乗者2名の同意が得られた後、ネモフィラに補充物資をと投入します〟と書かれている。――遠くから爆発音が聞こえる。だからなんなんだ、と投げやりな気持ちになる。そもそもネモフィラはこの土地で死ぬつもりであった。――爆発音と喧騒が近づいてくる。バグ個体ゆえに「おいらが死んでも代わりはいない」状態ではあるのだが、だからどうしたというのだ。「やはりわたくしは世界をもっと知らなければならない。貴女のような、予想もできないセカイにめぐり合うために…っ！」――閃光。稲光。いなづま。雷電。何も聞こえない。何も見えない。命の消えていく音が幻聴のように聞こえてきた頃。

――空から、手かせ足かせを付けた囚人服の白猫が落ちてきた。

「うにゃー、これは……あたしを狂わせる、自由の匂いだ！」
と言いつつ、視線は完全にバイクの方に向けられてるが。ちなみに着地した先はネモフィラの頭頂部である。一般的な人体の首だったら確実に首が骨折するほどの衝撃だった。そして、全く動じていないネモフィラの様子を察したのかすぐさま両手に繋がれている鎖で首を絞めつけてくる判断の速さ。しかし、さっぱり通じないので「うにゃにゃにゃ？」と唸って、頭に腰かけたまま顔を覗き込んでくる。
ヴィクトリアでよく読んだ、童話の中に出てきそうな魔女がよく被っている尖帽子。囚人服には【０１６】のプレート。これが「仲間になりたそうな目で見てきている」なのか？と自問自答する。いやいや、どう考えても死にたくないなら連れてけ！という感じだ。……背後から、恐らくは彼女を追いかけてきた警邏の足跡が甲高く鳴り響いてきた。
「死にたくないな――」
「いいだ」
「うにゃっ?!」
「後部座席さ乗れ。あとはこいつがどうにかしてくれるだ」
死ななくていい理由が出来たのなら。それでいい。
クロージャマシンの画面上に、待ってましたとばかりに次々と言葉がつづられていく。
ｍｅｓｓａｇｅ〝搭乗者２名の同意が得られた為、ネモフィラに補充物資を投入します〟
ｍｅｓｓａｇｅ〝Ｃａｓｔｌｅ―０との接続が確認されました。貴方の旅を脅かす、すべての障害に鉄槌を〟
ｍｅｓｓａｇｅ〝障害を確認、世界のことごとくを旅する我々はだれにも止められない〟
ｍｅｓｓａｇｅ〝どうやら戦うだけの価値がある敵のようですよ〟
「うるさいだ」
ｍｅｓｓａｇｅ〝わたしは声を上げておりません〟
「――えっ？　なになに？すごいにゃ～!!」

「ラバテラを支援した後、離脱するだ」
ｍｅｓｓａｇｅ〃これより、Ｃａｓｔｌｅ―０の戦闘マシーンとしての実力をお見せしましょう！〃
急加速急発進「うにゃああああああああああああああああああああああああああ!!!!???!」同意は得たから文句は受け付けないと言わんばかりの乱暴なスピードで、しかし機械的に正確で、効率的に自動的なドライビングテクニック。あっという間に、白猫を追いかけていた警邏と思しき集団を振り切り、蹴散らし。雷電をその身に纏って大立ち回りをしていたラバテラの元に急行する。ボロボロの姿になった黒髪の少女を背負って、ピクリともその場から動けないように見えた。
「手助けはいるだ?」
「――おやおや、丁度いいところに。高飛びのための席は空いていますかな?
これ、この通り。わたくし、すべての力を使い果たした後でして」
「次の都市がランダムでいいなら、どうとでもなるだ」
「では途中で捨てて行ってもらいましょう。
充電が回復するまで運んでもらえばどうとでもなります」
「なら乗るだ」
「…………う～ん、あたし間違えたかも……これが「好奇心はネコをも殺す」かもぉ～」

――世界旅行アーツの旅、実績一人目：囚人服の白猫――

「――当たりました！　どうですか？　狙い通りですよ?!」
「……その発言が、真実かどうか判断しかねるが。
　少なくとも、命中率はよくなってきたようだ」
「えへんえへん」
「場所は……島？」

第８話　６ック!!!　クライマーズ!!!　その②

――ブロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロ……

会話のない空虚な空間に、ただただ地を走る機械音だけが鳴り響く。

それを運転する男もこれまた機械的で〝寝る必要がないから、おめぇは寝てるといいだ〟なんて言って、本当に何日も寝ずに機械を走らせている。あの悪夢のような場所から一刻も早く離れたい身としては、この上なく助かることなんだけれども、あたしはこのネモフィラという男を図りかねていた。

初対面で殺意全開で脅したのにも関わらず、オリジムシを払うかのような所作をされただけで、びくともせず、その後の態度も常にフラットだ。悪意がなく、殺意もなければ、嫌味も言われず、〝調子はどうだか？〟とか〝尻が痛くなるから少し休憩するべや〟だのこちらを気遣う言葉ばかりで。

恐縮してしまう、どころか、気が抜けてしまう。

こちらに興味がないのなら、いつでもどうにでもできるという態度に神経をとがらせるべきなんだけれども、そうではない。じゃあ、なんなのかというと、完全にペット扱いされてるんじゃないかと思い始めてきた。

ご飯はくれるし、のどが渇いたころに待ち構えてたかのように水を渡される。

初めて見る外の景色に飽きてきたなーと思ったら、小型の携帯型電子端末とそれに挿すチップを渡され、使い方を教わりながら触ってみると、とても面白い。思わず寝ずにやってしまって、何度かご飯を食べ損ねてしまったが、そこに待ってましたとばかりにちょっとしたお菓子を貰える。

――あれ？　もはやあたしはネモフィラのペットでいいのでは?!!

最初はその考えに至ってむっとしたが、いやいやいや。

衣食住の世話をしてくれて、何も聞かずに逃亡の手助けまでしてくれる彼は、ひょっとしなくても、あたしの最高の飼い主では？　長い投獄生活と、突然訪れた自由の喜びに狂っていたあたしは、そういうわけでこの瞬間に人生の飼い主を定めてしまった。砂漠で一滴の水を与えられた哀れな遭難者のように、あたしの精神状況は詰んでいたのだ。ならそうと決まれば言っておかないといけないことがある。

「ごしゅじんー」

「……」

「ごしゅじんー…ってばぁ～」

「……???」

「あ、こっち向いたねぇ、ご主人ー」

「――おいらのこと言ってるだ？」

「うにゃ、そうだよ～」

「ええ……？」

どういうことなの？という視線を、後部座席にいるあたしに投げかけるご主人。

けれどもやはりその運転は機械的に正確で、障害物や大地の突起をまるで見えているかのように、効率的で自動的なドライビングテクニックを披露する。

う～ん本当どういう絡繰りなのかさっぱり理解できないけれど、そういう曲芸技能を持ってる人は見たことがあるから、その類なのだろうか。そんな感じに二人で暫く見つめ合っていると、余所見運転はそろそろ危険と感じたのか、ご主人は肩をすくめるとまた前を向いてしまう。

「――名前」

「……」

「あたしにねぇ、名前を付けて欲しいんだぁ」

「……なして？」

「うにゅー、今までのあたしの人生は……あの国に捨ててきたからさぁ」

「……」

「もー、捨て猫になっちゃったからぁ」
「……」
「ご主人に、名前を付けて欲しいんだぁ」
「……」
「うにゃ？」
「……か」
「――うん」
「おめぇも、そうなんか。そうか」
しばらくの間、なにか真剣に考えを巡らせている、張り詰めた空気をさせて。
ご主人は〝分かった、真剣に考えるだ〟とだけ言って、また何もしゃべらなくなった。

――ブロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロロ……
会話のない空虚な空間に、ただただ地を走る機械音だけが鳴り響く。
でもその時間は、きっとご主人があたしの名前のことを真剣に考えてくれている音だった。
あたしは、すべてがうまくいったかのように〝よし！〟と頷くと、猫がこたつでのびのびとくつろぐように、眠気に身を任せた。

――――旅立ちの日。はじまりの日。名前を付けられたことを思い出した。

「……ネモフィラ、それが君の名前だ」

【１０２】のプレートを渡され、そこには〝すべてがうまくいきますように〟と下手くそな字で書かれていた。ドクター複製体につけられた全ての名前には祈りが込められていて、使い捨て前提である儚さから、基本的には花の名前を、そして花言葉を贈られる。

本人の本質と真逆の言葉を贈られることが基本で、なにもかもうまくいかず、本来の制作過程のレールから大きく逸脱してしまった私に与えられたのはネモフィラ。全てがうまくいく、と言われて旅立たされた。

実際に今まで大きな成果を上げているのは〝そうあれかし〟と真逆の性質を名前として与えられた者ばかりだ。実際に呪いではなく、祝福としての名前を与えられて、私は偶然にも一つ目の小さな成果を上げることになった。

――名前とは、祝福であるべきなのか？

しかし真逆。我々の性質に照らし合わせるなら、その例に倣って真逆の意味に付けられている。これは祝福の逆説と考えると呪詛なのでは？　そう思うと、調べれば調べるほど碌なものが出てこなかった国を思い出す。ヴィクトリアは、工業用の設備から出る煙で、まるで国全体が霧のように覆われており……いや、言葉を取り繕うのはよそう。ゴミ、汚泥、排泄物、遺体、鉱石病、煤と霧…そして、これに伴う下水処理、墓地、スラム街、公害等々、とにかく「不潔」にまつ

わる言葉が付いて回った。もちろん、現代的な鉱石技術によって主要な箇所は縫い合わせるように取り繕われている。あの国で、人間として扱われているものたちが住まう場所は、最先端の贅を尽くした技術で覆われていた。まるで臭い物に蓋をするかのような惨状であった。そして私があの国で、最期の場所と最後に定めたのは、そういった人たちが隔離され、労役を課されているような……〝ドクター〟にとってはとてもじゃないが受け入れられない場所であった。だからこそ、ラバテラはあそこにいたのだろうと思う。

まぁだからなんなんだという話ではあるのだが。

私にとってはそれは直接的には関係なく、ただ廃棄されるなら廃棄されるなりに相応の死に場所がお似合いなんじゃないかという投げやりな気持であった。だからドクターにとって、全てがうまくいかなかった私は、皮肉を込めて全てがうまくいくような名前にされているというのも、投げやりな気持ちでつけられたんじゃなかろうか。なんだよそう考えると全然真剣に名前考えられてない。むしろこの名前で呼ばれるたびに、お前は役立たずだと繰り返し呪いのように言われてるような気分になる。

――やはり、名前とは呪いなのだ。

猫耳の少女が安心して後部座席で寝こけている間に、すっかり世を拗ねてしまったような様相になったネモフィラは、半ば八つ当たり的に、ならばこの様式にのっとって、嫌がらせのような名前にしてやろうと真剣に考え始めた。ダスト、スラッジ、エクスクリーメント、コープス、エピデミック、ソート、フォッグ、ミスト、ヘイズ、ドレイン、グレイブヤード、ポリューション……およそ女子に付けるに値しない余りにも酷い共通語を脳内で並べ立てていく。同時にその脳力の高さを無駄に活かして名付けのシミュレーションも同時に行う。ほぼほぼ嫌な顔をされて正気を疑われるという結果が出る。馬鹿な！Ｃａｓｔｌｅ―０に現在までの経緯を通信ケーブルを介して聞いてみる。君の意見を聞こう！

ｍｅｓｓａｇｅ〟疲れてます？　スリープモードに切り替えた方がよろしいのでは？〟

私は疲れてなどいない、私は正常だ。バイタルも正常値を示している。

ｍｅｓｓａｇｅ〝ウルサスに到着すれば…〟

ｍｅｓｓａｇｅ〝オルグが手配した企業車に同乗して、シラクーザまで快適に過ごせます。〟

ｍｅｓｓａｇｅ〝しかし、やはり寝たほうがよろしいのでは？〟

いいや、わたしは疲れてなどいない。

この前連絡方法を確立した一般的見解を持つお嬢様に意見を。

ｍｅｓｓａｇｅ〝一般的見解から考えて軽蔑されると思われます。〟

なぜ。

ｍｅｓｓａｇｅ〝変なところで無知なお子様の振りをするのは止めてください。〟

本体の年齢、そして私の製造年月日から考えてわたしは子供だ。

ｍｅｓｓａｇｅ〝子供でも、折角できたお友達を失うような行動を普通はしません。〟

だが、わたしは普通ではない。

ｍｅｓｓａｇｅ〝そうですね。それで？　その論理でお嬢様を納得させることが出来ますか？〟

でき……、でき、ない。

ｍｅｓｓａｇｅ〝やはり、どうやらお疲れのようですね。お休みになっては？〟

Ｃａｓｔｌｅ―０はどう思う？

ｍｅｓｓａｇｅ〝私は……わかりません。しかしデータベースにはこうあります。〟

ｍｅｓｓａｇｅ〝ないです〟

ｍｅｓｓａｇｅ〝頭に来ますよ～〟

ｍｅｓｓａｇｅ〝悔い改めて〟

なんだそれ。

ｍｅｓｓａｇｅ〝古代の言葉です。〟

古代技術のデータなんぞアテになる筈もない、今私は現代的な納得

を求めている。電話だ電話。
ｍｅｓｓａｇｅ〃私も含めて古代技術の無駄遣いだという矛盾は無視なんですね〃
「もすもす」
ｍｅｓｓａｇｅ〃仕方ありません。ある程度フィルターをかけておきます〃
『いま食事中だったのだけれど…？』
「……それはすまねかっただ、掛けなおすだ」
『いいえ構いません』
『それで、この画面表示からするとヴィクトリアを離れた後なのでしょう？』
『なにか不測の事態でも起こったのかしら？』
「あー。親しい友人でねど、話せぬこって」
『……親しい?!　コホンッ――！』
『友人というのは少し不満がありますが、いいでしょう』
『なにかお困りなのね？　なら、親しい友人の、私が、いつでも相談に乗りましょう』
ｍｅｓｓａｇｅ〃喜んでもいますが、なんか微妙に怒ってますよ。なにしたんですか？〃
余りにもあたりがきつかったから……。
日傘プレゼントしたり、帽子プレゼントしたり、ドレスプレゼントしたりした。
ｍｅｓｓａｇｅ〃悔い改めて〃
なんで???
「あ〃ー、猫を拾っただ。ヴィクトリアで拾っただ、猫。
白猫で。名前を付けてやんねーと可哀想だでな、なんかいい案はねーかと思ってでだな……」
『……。場所を移します。少しお待ちになって』
ｍｅｓｓａｇｅ〃電話が保留状態になりました……電話先のデータを同期中……。〃
ｍｅｓｓａｇｅ〃映像データをダウンロード中です…。〃

ｍｅｓｓａｇｅ〃隔離労働区画での爆発、テロ組織の犯行?!
ｍｅｓｓａｇｅ〃監視カメラに写っていた背格好から指名手配中〃
ｍｅｓｓａｇｅ〃現体制への犯行か?!　感染者の蛮行!!〃
ｍｅｓｓａｇｅ〃おめでとうございます、有名人ですよ?〃
データの詳細を見なくても何となくお嬢様が知らせたいことが分かったよ。
ありがとう、Ｃａｓｔｌｅ―０。
ｍｅｓｓａｇｅ〃頭に来ますよ〜〃
お前ＡＩだよな?!　クロージャのＡＩって皮肉も解釈できるのか???
ｍｅｓｓａｇｅ〃わかりません。しかしデータベースにはこうあります。〃
ｍｅｓｓａｇｅ〃（解釈でき）ないです〃
なんでも古代のデータベースのせいにしてません???
『――遮音装置を起動しました。やっぱりあれは貴方でしたのね』
『私も独自に調査して分かったことなのですけれど、この国の感染者への対応はひどいものです』
『……行き場のない猫を拾った代償としては、余りにも多くを敵に回す行為だったのでは?』
「ヴィクトリアは、国外に出た余所者を追いかけるほど暇があるだか?」
『貴女が拾った白猫ですけど、どうも常習的な脱獄犯だったようで……』
『すくなくとも新聞の見出しはそう言っていますわ』
『生死不問の捕獲命令が出されています……もちろん、追跡命令も』
「……だから服も替えるし、名前を付けるだ」
『……事情はよく分かりました』
『名前と服装の相談には乗ります、ただし条件がありますわ』
「――条件?」
『……週３で定時報告すること!』

『世界を回っている貴方に時差の違いもあるでしょうが』
『ヴィクトリア時刻で私が起きてる時間に必ず電話を』
「……めんｄ」
『――ああっ、急に眩暈が?!』
『どこかの鉱石病研究狂いが事故か事件に巻き込まれたんじゃないかと思って』
『ここ数日碌に眠れなかったせいか急に眩暈がしますわ』
『――あぁ、なんてことでしょう』
『ヴィクトリアに蔓延している暗黙の了解に不慣れな貴方を』
『さんざんフォローした、親しい友人の、私が、体調不良で倒れてしまうかもしれません』
「……必ず、お電話させていただきますだ」
『――その言葉を信じますわ』
『それで、その名前の事なんですけれども……念のために聞いておきますが』
『拾った猫はレディでいいのかしら?』
「……」
『……その、同期したデータから貴方の考えた名前候補を見たのだけれど』
『ネモ、貴方はその猫を来週のゴミの日にでも出すつもりですか?』
『まったく……』
『貴方が日ごろ呪いのように口にしている〝一般的見解〟とやらから言わせて頂きますと』
『一つだけまともな名前候補がありましたわ』
「――えっ……?」
『――えっ……?じゃ、ありません!』
『やっぱり嫌がらせ目的でで考えましたのねこのラインナップ!!』
『……よほどひどい目にでもあったのでしょうが』
『とにかく……貴方ならこう言えば分るでしょう。〝気象用語以外〟から選んで差し上げなさい』
「嫌そうな顔をされる未来しか見えないだ」

『……それは、名前に込められた由来を説明してないからではなくて？』
『我々が専攻しているのは源石研究ですが、猫さんはその歴史の被害者の一人でもあります。』
『まさしく天災に遭ったようなもの…』
『なら、気象を顕す言葉に近く、そこから外れているというのは、験担ぎとしてもよろしのではなくて？』
「……」
ｍｅｓｓａｇｅ〃外付け常識回路、味方につけといてよかったですね!!〃
うるさい。

『君は……ドクター。ドクター…ネモフィラだったな。
【ドクター】が君を送り出すことにしたシラクーザの島に関してだが、情報が上がってきた』
オルグに手配された企業車の中に、Ｃａｓｔｌｅ—０に接続可能な秘匿機能付きの超長距離通信機が〃さぁ使え〃とばかりに置かれていたため、三名による厳粛な審査の下、起動すると【ＮＯ　ＩＭＡＧＥ】の画像が立ち上がり、話し始めた。オルグが〃出発する前に通信してくれ〃と言っていたことから重要なことだろうとは思っていたが、今のところ、なんの当てもなくさまようことになると思っていた

一同にはうれしい情報である。
『その島は高級住宅街として開発されたが、シラクーザ内での抗争が原因で戦場と化した。
いまはもう、その抗争は終結し、
時間が経過するにつれて再び高級住宅街として開発され始めたが……』
グラフが表示され、年経過による高級住宅街への入居人数が表示される。戦場と化した前後では少ないが、時が経過するにつれ入居状況が改善し、一時期には空きのないほどになったが、なぜか翌年から急速に減少傾向にあるようだった。
『この原因を調査し、できれば結果を知らせて欲しいというのが私の一つ目のお願いだ。
二つ目のお願いが、そこに彼女を同行させてほしい、ということだ』
彼女？と三人が辺りを見回すも、そこには出発前で待機中の運転手や、荷物搬入のための作業員くらいしかいない。そしてその作業員が、仕事が終わったのか、バサリ、と作業衣を脱いでこちらに近づいてきた。作業衣の下に、血に濡れたような、真っ赤な服装を着た作業員が。――というかどう見ても未成年の少女だった。その年齢故だろうか、とてもいかしたセンスをしているとネモフィラは感心した。
「いたい！　目にいたいにゃ」
ｍｅｓｓａｇｅ〃私は素敵だと思いますよ!!　独特な服装のセンスですね〃
『……自己紹介なさい』
最高に格好いい登場シーンを演出したはずなのに、服装が派手過ぎてちょっと外してしまったみたいな微妙な空気の中で、少女は名乗りを上げた。

「……レッド。ウルフハンター。ここも、オオカミの匂いがする。」

第9話　6ック!!!　クライマーズ!!!　その③

《――なるほど、君の状況はよく分かった、ネモフィラ。
おそらく君は、何らかの原因で発生した記憶の投影の中に巻き込まれたのだろう。
いや実体を持った記録というべきか》
「……記憶の投影？　実体を持った記録？　これが現象とでもいうだか？」
《――だが、それ以外に説明がつかないのも確かだ。
忌々しいことに、私もその手の類には戦場で何度も遭遇している。
大きな想念が渦巻く場所で、局所的に発生する現実と比較して明らかに異なる世界。
我々の間では単に〝異界〟と呼んでいた、恐ろしい場所だ》
「……確かに、開発された高級住宅街と言われて来てみれば、
広がってたのは未開の地のような有様だっただ。
すでに数えきれないくらい戦闘になって、
外部となんとか通信をつなぐために逃げ隠れる他なかっただ。
おらたちは何時からここに囚われていたと思うだ？　抜け出す手段はあるだか？」
《――――――ッ?!　不味い、君が何を言っているの分からない…。
私の経験談だが、その空間は何もかもが捻じ曲がってると考えた方がいい。
なにせなんらかの記憶や記録から構成されているような世界だ。
夢の中で見るような支離滅裂に間違いなく振り回される。
……今通信が繋がっているのも奇跡のようなものだ。
時間の概念がずれ、季節感の狂った状態になる前でよかった》
「質問に答えて欲しいだ！　ジェネラル!!」
《――よく聞け！おそらく今繋がっている通信内容すらおかしくなっている可能性が高い!!
――逃がさない、わたしとあそぶの。あそんでくれなきゃだめ。原

因を探せ！――許さない、逃がさない。さもなければ――うるさぁあああああああああああああいぃいいいいいいいいいいいいいいいｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｐｐｐｐｐｐｐｐｐｐｐｐｐｐｐ≫

〝ｍｅｓｓａｇｅ〟Ｓｈｕｔｔｔｔｔｔｔｔｔｔｔｄｏｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｎｎｎｎｎｎｎｎ〟

――おい！　Ｃａｓｔｌｅ―０！！！

〝ｍｅｓｓａｇｅ〟乗っ取られそうなので自動デバッグ終わるまで持ちこたえてください〟

はぁ⁈！　古代技術の結晶が敗北するとか本気で言ってるのか⁇

〝ｍｅｓｓａｇｅ〟気が済むまで遊んであげれば何とかなると思います〟

いや意味わかんねーよ！　ヘイズもレッドももう限界なんだぞ！！どれだけ戦ったと思ってる！！

〝ｍｅｓｓａｇｅ〟気が済むまで遊んであげれば何とかなると思います〟

遊ぶ？　今までのがお遊びだとでも？　それともそいつと人形遊びでもしてやればいいのか⁇？

〝ｍｅｓｓａｇｅ〟肩の人形を大切に〟

は？

〝ｍｅｓｓａｇｅ〟〟

――くそっ！！

思わず拳を大地にたたきつける。完全な孤立無援。仲間は消耗のし過ぎで完全に意識を失っている。最期の賭けとばかりに、命からがら逃げた先で外部に応援を要請しようとしたが、あっという間に最期の頼みの綱であったＣａｓｔｌｅ―０まで落ちてしまう。外部からの操縦アクセス権を残してくれたのが唯一の救いか、動けなくなってしまった仲間を運ぶ分には全く問題ない。

ならば、一刻も早くここから移動しなければならない。ジェネラルの情報が唯一の頼りだ。おそらく、途中からこちらの声が聞こえてなかったか、なにかが聞こえていたのだ。だからジェネラルは必要な情報だけ伝えてくれたのだろう。

　通信が途切れる前に言っていたこと。支離滅裂な状況に巻き込まれる前にやるべきこと。原因を探すこと。いや原因ってなんだよ。見つけられなかった時、解決できなかった時、さもなければどうなるかなんて考えたくはないが、ジェネラルが〝忌々しいことに〟なんて表現を使うほどの事態だ。その結末に例外がないだろうことぐらいは容易に想像がつく。あとは何だ？Ｃａｓｔｌｅ—０は何と言っていた？遊び、誰と何を遊べばいいんだ？気が済むまでということは、この現象の原因は気が済むまで遊べば収まるような存在なのか？あと肩の人形ってなんだ？そんなの最初からいな…………。

「——なんかすげぇぐったりしてる変な人形がいるだぁああああああああああああああああああああああああああ!!!!」

「————誰が変な人形だごるぅぅぅぅぅぅぅぅぁああああああああああああああああああああああああああああああ!!!!!!」

「ジャベッタァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

「あぁ!!?!!　当たり前だろうぅぅぅ………が?

　なんだとぉ?　聞こえているのかぁ、貴様ぁ?」

「ひぃ?!!　漏れてる漏れてる!　お腹から臓物っぽいのが漏れてるだ!!」

「……おおっとぉ!　ちゃんと縫わなかったなぁ、あの小娘めぇえ。

　ジェントルメェエエンの一張羅が台無しだぜぇ……」

　粗相を恥じるような所作で、その人形?猫のような縫ぐるみは、ワタをいそいそと体の中に戻していく。ずぞぞぞぞぞ、ずぞぞぞぞぞぞぞ、と。生々しいピンク色の管が引きずられながら戻っていく様子は、さながらスプラッターホラーだ。

　現状がホラーそのものなのだが……。そんな状況下で碌でもない

姿をした異形が、あからさまに不審者らしく声を掛けしてくるなんて展開は、実にらしいと言える状態だ。この環境の、現実とあまりにも乖離した妙な法則に照らし合せると、ネモフィラとその一行はその何らかの条件を満たしたのだろうか？

状況を俯瞰できる黒幕でもない彼らにはこの時あずかり知らぬことであったが、たった四人でここまで来れたこと自体が人形が動く切っ掛けになったのだ。人形は、自らの主をこの余りにも終わってしまった世界から解放する為の決断をしたのだ。

「……通信内容聞いていたぜぃ？

まさか現実とつながる場所まで辿り着くとは恐れ入った。

大した勇気、大した度胸、大した戦力だ……。

だからよぉ、俺っちの話を少し聞いちゃあくれねぇか？」

ネモフィラは正直、仲間を載せたＣａｓｔｌｅ—０を動かして何処へでも駆け出したい気持ちでいっぱいいっぱいだった。人知を超えた異様な状況に、胡乱な存在が新たな登場人物として出てくる時点で、更なる状況の悪化か、地獄への片道切符を押し付けられてしまったかのような心持ちになってしまうというもの。しかし、既に現状、全員死亡一歩手前というところまで追い詰められていて、何処とも知れない異界へアテもなく自棄になって飛び出すのも躊躇われた。

己だけの命を背負っていたあの頃とは違う。死ねば悼んでくれる友人がいて、死んだと聞けば悲しいと思える友人がいた。何よりもこの場で、ネモフィラだけが彼女たちの命を背負っていた。仲間の命を軽々しく放り出すわけにはいかないと思える程度には、ネモフィラは彼女たちのことを悪く思っていなかったのだ。だから、本当の本当の本当に誠に遺憾ではあるが、此処を飛び出して目算もなく逃げ惑うよりも、文字通り目前に迫った、選択すべきことがあった。胴体をぐるぐる巻きにされ、眼も口も耳も縫い合わされているのに流暢に喋り倒す怪しげな人形の話を聞く選択を。

———と、ここまで思考を巡らせるまでコンマ０１秒。ドクター生来の性能により、素早い状況判断能力として発揮され、結果として、その即断がここまで全員五体満足でやってこれたわけだが、それを知

る由もない人形は驚嘆した。
〝狂ってやがる、最高だ〟、と。
「――お前の望みを言うだ」
「おぉい、おぉい、話が早いのは助かるが、こっちの事情を聴かなくてもいいのかよぉ？」
「興味ねぇだ、そんなことより優先することがあるだ。言え、何をすればいいか」
「……ふん。端的に言うと、さっきまであんたらがやってたように盛大に。
記録と記憶を壊して回ってもらい続けて欲しいってことと、あんまりにも不憫な嬢ちゃんを三人、助けてやってほしいってことさ」
「……ジェネラルの経験談の裏取りが取れてしまって、とても残念に思うだ……。
――おらたちに重要なのは一点だけ。それでここから出られるか、という一点に尽きるだ」
「うち二人は戦力的な意味で必要だろうさ。
……もう一人は、元凶だ。辿り着きさえすれば、脱出に重要な協力が得られるだろうさ」
「――――む？？？？――――ぬ？？？――――なるほど、その娘っ子は何歳になるだ」
「おめぇ、マジで最高に逝かれてやがるな」
「危険物を手順通りに扱えなくて事故が起きるなんてことは、よく有ることだと思うだ」

――――――人

形：不吉な人形（猫？）を手に入れた。

「……どう？」
「後ろ」
「……これなら」
「右」
「……あてずっぽうが、……当たってるだけ!!」
「ずいぶん、器用な真似をするものだと思うだ。
その大きな尾で体を釣り上げることが出来ていることに驚きを隠せないだ」
「～～～～～～ッッ!!　嘘！嘘！嘘！絶対に信じない！
……私の声だって、……聞こえてない！
……だから、……あなたは、……私の攻撃を避けられない!!」
「おらは全盲じゃないんだけんども」
「おぉい、俺っちは人形だがなぁ。傷つく心も持っているんだぞぉ？」
「心があるなら仕事するだ」
「あいよぉ、ボス」
ｍｅｓｓａｇｅ〃再起動したらすぐさま酷使とか、貴方たちには情ってものが存在しないんですか???〃
生命なき者たちが、心を持つかのように振る舞い、ひどく動揺する蠍を追い詰めていく。
国外へ要人の暗殺任務へ付いていた蠍は、シラクーザの島で繰り広げられていた抗争の渦中に巻き込まれた。国元に嫌気が差していた蠍は、国外派遣される為の信頼を必死の思いで稼ぎ、運よく監視兼同行者が任務中に死亡したことによって逃亡の機会を得た。しかし、蠍の運はそこで尽きてしまう。
最期の義理とばかりに、指定されていたターゲットを暗殺し、律儀にも通信機で国元へお別れの挨拶をしたところで、まるで神隠しのように荒野に放り出され、奥深い熱帯雨林に放り出され、北方の軍事拠点のような場所に放り出され、ただひたすら戦闘を強いられた。
季節感も天候も一定せずぐちゃぐちゃで、あれだけ忌避していた暗殺技術を全力で発揮しなければ生存できないことを、蠍は今までの戦場の勘から察してしまっていた。そして、とうとうどれだけ時間が

経ったのかも忘れるようになった頃、蠍は記憶と記録に敗北した。
敗北した者に待っていたのは、この空間に縛り付けられて、空間ごと移動する「それ」に使われ続けることだった。
そして、蠍の、永遠とも思える、戦いの日々が始まった。
最初は、蠍と同様に、この場所に迷い込んだか引き寄せられたかされてしまった多くの異邦人に怯え、ただ反射的に倒していただけであった。だが、いくら倒しても、どれだけ時間が経っても、蠍がそこから解放されることはなかった。
同じような境遇の人は何度か見た。なんとか接触を図って、この状況を脱しようとした。でも無理だった。伸ばした手はその体を突き破り、声を掛ければ尾っぽの先にぶら下がっていて、なりふり構わず物理的に接触すれば大地から突きあがった針の山の中にその者たちの、物言わぬ躯が積みあがっていくだけだったからだ。
いくら暗殺向きの、最高峰レベルの戦闘訓練を受けていたといっても、正常な精神を保つにはその状況は余りにも厳しすぎた。蠍もヒトの子であり、そうである以上はどこかで精神と体を休める必要があった。だが、蠍を縛り付ける「それ」は休息を許さず、蠍事態を一つの歯車として組み込んだ。当然、激しく抵抗した。思いつく限り何でもやった。そして諦めざるを得ないほどの時間が経った。いや、どれだけの時間が経ったのかももう定かではない。
時間が解決するという言葉は、暗い物陰に潜む蠍には適用されなかったのだ。時間が経てば経つほど、解決しない事態、解消しない現実に精神が打ちのめされ、逃げようとしても逃げられず、死のうとしても死ねない。蠍を逃がさないための歯車が、がっちりと噛み合って、そのうちに蠍が何もかもを諦めて、まるで決まった時間に響く鐘楼のように、精神的死を迎え、周りの幻影達と同じ存在に成り果ててしまうのは時間の問題だった。
時間は蠍に味方せず、圧倒的理不尽を押し付ける「それ」の味方だった。「それ」はただいつものように、蠍が諦めてしまうのを待てばよかっただけだった。いつも通りの手順で、歯車という部品が完成するのを眺めるだけの作業でしかない。だから、これは本来ならそれで終

わる話だった。歯車としての機能を押し付けられた蠍は、物言わぬ人形一歩手前の状態になっていて、到来する外敵を排除する装置の一部として「それ」からの全面的なバックアップを受け、怪物のようになっていくはずだった。いや、成り掛けていた。バケモノそのものといっていいほどに。

だが、人形の持つ不可思議な力で、全快したネモフィラ一行の敵ではなかった。

ネモフィラもＣａｓｔｌｅ—０も人形も、痛覚が存在しない。自分の躰が壊れれば嫌がるし、行動に支障をきたすだろうが、それだけだ。戦略も戦術もくそもなく、強引に力押しできてしまえる生来の性能を持っていて、そこに的確な指示と、適正な強さの仲間が揃っていればあっという間に事態は解決するのだ。だから、よってたかってもみくちゃにされた蠍は、あらかじめ決められていた場所へ打ち上げられ——

「——ハンティング、始める。」

レッドに急襲され。

「——卑怯？　そんなのどうでもいいよぉ？

勝てればいいんだもん。勝てれば～」

レッドをかわした先にいた、ヘイズによるアーツ爆撃をもらい。

「——ホーーームラーーーン!!」

気が付いたらＣａｓｔｌｅ—０で寝てた少女のフルスイングにより終わりを迎えた。

「——え？誰？　Ｃａｓｔｌｅ—０はどうしただ？」

尚、少女の存在に気が付いていたのはＣａｓｔｌｅ—０だけだった模様。

ｍｅｓｓａｇｅ〃いやぁ、正直私だと出力不足だったので助かりました〃

ｍｅｓｓａｇｅ〃……ところで、どこのどなた様で？〃

「こんにちは！」

ｍｅｓｓａｇｅ〃はい、こんにちわ〃
「おぉう！　ようやく見つけたぜぇ！
どっからでてくるか、てんで予測がつかなかったんで困ったぜぇ、嬢ちゃんんんん」
「……んー？　はれ？　はれれれ？
きみはだれだっけ？　はれれ？　ここはどーこー？　ボクはだーれー???」
「――それはこっちが聞きたいだ」

――研究成果：暗殺訓練全書を手に入れた。
――追　憶：孤島の戦争を手に入れた。

権力闘争により、その一家は陥れられた。
手段は古くから使い古された単純なもので、立場や権威を持つ者ほど入手しやすい危険物を贈答品のように加工した物があればよかった。感染したと同時に、人間として扱われなくなった一家は、高級住宅地と表向き呼ばれる流刑地へ隔離されることに。
流された流刑地の、割り当てられた豪勢な住居で、突如家族や使用人の体調が悪くなった様子を不審に思った一家の主人が辺り一帯を調べることになった。駆けずり回って住居自体に何も問題ないことを確認した一家の主人は、まさかそんな馬鹿なと己の発想の飛躍にひやりとしつつ、シャベルで家周りの大地を掘り起こした。ガツンと。わずか一掘り、二掘りでその絶望に行き当たった。鉱脈だった。一家の主人は一瞬で目の前が真っ暗になり、ほどなくして怒りで真っ赤になった。
そして崩れ落ちた。ここまでするのか、そうまでして私たちを殺したいのか、そんなに私たちは悪いことをしたのか、と。目から血の雫が流れ落ちていく。

一家の主人は有能であった。だから迂遠な方法で陥れられ、迂遠な方法で殺されようとしていた。陥れた者たちは、その後のことをこそ恐れていたのだ。徹底的に心を、精神を、檻砕かなければ逆撃に遭うことを、その経歴から知っていたから。ただ一つ失敗した点として、陥れた者たちは彼を直接殺すべきだった。そうしていれば、この後に続く地獄を味わうことなく、一生を難なく過ごすことが出来たのだから。

そして、一家の主人が島の住人をまとめあげるのに一月と掛からなかった。その隣には妻と、薄暗い目をして人形を抱きしめる娘の姿があった。

島ごと殺処分される島、シラクーザの高級住宅地。その国は、死に行くものに最後の晩餐を与えてやる慈悲を以て、その島を開拓したのだから。だから、そんな状況にふざけるな！と叫ぶ者たちの、起こるべくして起きた戦争が始まった。

いや、それを戦争と呼べるのかどうか疑わしい。正規軍と民間人での戦闘の優劣など比べる間もなく、一方的な虐殺が続けられていく。狙い通りに。たとえ相手が正規軍であっても、戦争に参加した護るべきものを持つ男たちは、死ぬことを恐れることなく戦い、死んでいく。狙い通りに。

全てが、薄暗い目をして人形を抱きしめる少女の下に。

――集まっていく。集まっていく。集まっていく。集まっていく。集まった。

一家の主人は娘に最期の言葉を残した。こういう方法でしかお前を護れなかった私を許すな。

その主人の妻は娘を最後に抱きしめた。あなたを一人にしてしまう私たちを許してほしい。

そうして、呪われた異界はここに完成した。

島そのものを覆う結解のように、残された子女を護る檻のように、悪意あるものをことごとく滅ぼす悪霊と、害意あるものを灰塵に帰す戦場の記憶と記録を番人として。

当然のように暴走しながら、国中にその被害を広げていった。広がった被害は、記憶と記録になり、幻影となって走り続ける運命をたどった。そんな悪業を、年端もいかない少女が耐えられるはずもなく、決壊して。

「――その感情はもらうぜえええ?」

それで終わりだった。それだけで決壊は止まった。

その人形は少女の安全弁だった。狂乱することも、発狂することも、悲嘆にくれて自死を選ぶことも許さないといわんばかりに、少女から次々と奪っていった。親を恋しいと思う郷愁も、大切な人たちを亡くして悲しいと思う悲嘆も、なぜこんなことをし続けなければならないのかという虚無感ですら、少女から奪っていった。

そうやって日々を過ごすその少女には、世話役が付いた。当然だ。もはや少女こそが最終防衛ラインであり、この島に残った最期の最高戦力なのだから。誰もが少女を疎んだ。愛する夫が、愛する息子が今も少女に使われ続けていることを想うと、死の安らぎすら与えられないことに、憤りを覚えた。誰もが少女に感謝した。後を託された島民が生きているのは、すべて少女のおかげであり、年端もいかない子供たちが明日の世界を生きていけることに感謝した。

そうやって恩と仇が折り重なり、少女に口汚く罵声を浴びせるものがいなかったわけではない。だからこそ、安全弁は正しく機能しなければならなかった。人形は奪い続けた。少女が死なないように。少女以外からも、奪うことを躊躇わなかった。たとえ、人形に奪われ続ける少女の精神が、少女の魂を、虚ろな人形のようにしていこうとも。

少女が、ただ生きているだけの状態を、その少女の家族は望んだわけではなかった。

しかし、それ以外に方法がなかった。

そこには救いはなく、ただすべての破滅だけがあった。
陥れられた家族は使用人と少女を残して死に、島民の男手はほぼ戦死、一家に陥穽を仕掛けた下手人は軒並み非業の死を遂げ、国家には甚大な被害を〝神隠し〟という形で定期的にもたらした。
誰かを不幸にしようとして、誰もが不幸になった。そして、暴走しながら機能し続ける異界を維持していた人形にも限界が近づいてきていた。奪い続けた感情を処理しきれず、それらが幻影となって勝手に動き出したのだ。幻影は、全てが少女を標的に見据え、各地で被害を拡大させながら迫っていく。その幻影の殺意は、原因を止めるための良心でもあった。元栓を捻ってガスや水道を止めるようにに、原因の息の根を止めるための。
これらが少女の体に辿り着いてしまえば、絶望に暮れた少女はその場で舌を噛み切るか、両手で首を掻き切ってしまう。それだけは阻止しなければならない。最悪の事態が、取り返しのつかない事態になってしまう。もはや少女単体に影響するだけの話ではない。間違いなく暴走する結末は、いつだって同じなのだ。
大きくなり過ぎた感情の幻影が、国中の人間の感情を無理やり上書きして、国家を巻き込んだ壮大な自殺に繋がることは明白だった。

「――そしてぇぇぇ、戦争は、まだ続いている」
「……」
「だが、このまま終わっちゃあ、全てが台無しだ。
誰もがなんのために戦ったのか分からないまま、御仕舞になる」
「……」
「――集まった。お前らの協力で全部集めきれた。
残っている幻影は、いまや俺っちだけになった……」
「……」
「記憶と記録は、今全て俺っちのはらぁあああン中にある。
あとはこれを使って、全て有耶無耶になるように書き換えてやるだけでいい」
「……」

「ここは高級住宅地だった。戦争なんてなかった。
源石鉱脈の直上に誰かを陥れる目的で、意図的に建てられた屋敷なんてなかった。
莫大な金を使って仕組まれた、国家の膿を吐き出すような事件は起きなかった。
開発の目的は、あくまでも金儲けの為さ。と、そういうことになる」
「……」
「人死や失踪は、狂言にしか思えねぇような尾ひれ羽ひれが付く。
いわゆる、都市伝説ってやつだな
低俗なゴシップ誌あたりで取り上げられて、さぞかし有名になるだろうよ」
「……」
「いま、おめぇが抱きかかえてる嬢ちゃんは、この島で最も、忌み嫌われる存在になる。
誰もが知ってる、公然の秘密。都市伝説の原因ってやつだな。
もともとそういう流れでこの戦争は成立してたんだからよぉ、不自然さは生まれねぇだろうさ」
「……」
「あと、使用人の娘っ子たちも連れて行ってやってくれ…。
決死の覚悟で最期まで仕えてくれてた、義理堅い、いい娘っ子たちだ」
「……」
「そんなよぉおおお顔、するんじゃねぇえええよ。
俺っちは消えるわけじゃねぇんだ、嬢ちゃんに抱きしめられてるそいつが、俺っちさ」
ネモフィラに表情はない。顔はない。表現可能なものではない。
顕すことが出来るのは言葉だけだ。だから、言葉を尽くしてくれという、そういう話なのだ。
「……」
だが、ネモフィラは何も言えなかった。何を言えばいいのか分からなかった。

人の形をしていないものが、人の魂を持つかのように振る舞い、大切な人を護るために心を尽くした結果を見て、何も言えなかった。
ネモフィラは、その腕の中で眠る幼い少女を見る。ここに結果がある。
恐らくは少女は何もかもを忘れていくのだろう。
そして、目の前でうっすらと消えかけていく人形を見る。何もかも忘れ去られることを選んだ、儚い人の形を。目を覆い、耳を綴じ、口を塞いで。それでも尚、その体を、精神を傷つけ過ぎて、バラバラになりそうだった胴体全体をベルトでグルグル巻きにして、幼い少女の心を護り抜いた愛の形を。
ネモフィラはなんとかなにかを言おうとした。主の為に心を尽くした人形に最期の言葉を贈ろうと懸命に頭を捻った。しかし、こんなにもあり方の違う己の言葉が一体何の意味があるのか、論理的結論を探り当てることが出来ず、何が違えば私はそうなれたのだという想いばかりがぐるぐると頭を巡るばかりで。今、目の前にある結果を見つめることしかできなかった。
少女に抱きしめられている物言わぬ人形と、目の前で愉快そうに踊っている人形の違いを。

「……あ、嬢ちゃんに事情説明すんの面倒くせぇからよぉ、おめぇ今日からお兄ちゃんな？」
「――――は？？？？？」

――――――人　形：モルテを手に入れた。

その後。
ネモフィラの帰還を待っていた面々に初対面の少女は、とても安心した表情で当たり前のように、お兄ちゃんに問いかけた。
「……お兄ちゃん??」
「ちょ」
「――わぁ、かわいい娘だね！」

「……ご主人、正直に言うよぉ？　――――ドン引きだよ」
ｍｅｓｓａｇｅ〃要救助者を連れ帰ったと思ったら、お兄ちゃん呼び強制とかあなたマジなんですか？〃
「……ドクター。……いや、なんでもない。……でも、ダメだと思う。」
「今までにない速度でおらの風評被害が高まってるのを感じるだ」
誰しも常に幻影と戦っている。
それは過去の記憶であったり、隣にいないライバルであったり、追いかけている憧れだったりする。しかし、ネモフィラが今戦わなければならないのは、周囲から貼られたレッテルという名の幻影であった。
「……さっきまで、……死闘を繰り広げていた相手から、……お兄ちゃん呼びされてる。
……すごい。
……私と同じだ。……戦いの中で、……信頼関係って、……築けるんだ。
……やっぱり、……ドクターはすごい。」
ただし、歪んだ信頼関係を築き上げてしまった相手からの幻影は、なかなか気が付けないものである。

――――悪　夢…〃童女の孤独な戦争〃を開放した。

そうやってバカなやり取りを終えた一行が、取り敢えずこの国を出ようという話になり、不可思議な空間からも無事脱出に成功し、そこから記憶がなく。ネモフィラが次に主観的に己の状態に気が付いたのは、Ｃａｓｔｌｅ―０の操縦席で荒野を走っていて、急いで仲間の無事を確認を行い、そこに突如、通信が繋がったところからであった。

「……なん？　なんて言っただ？　おらがそう答えただか……？」

『――あぁ、確かに通信相手はネモフィラ、君だったよ。

隣でケルシーも聞いていたし、アーミヤも怒っていたぞ。僕もさすがに止めた、君を』

「……おま、おまんはそれで納得しただか？」

『納得も何も、僕は再三止めた、それこそしつこいくらいにな。
だが君は言うことを全く聞いちゃあいなかったじゃないか。
会話をしてるようで全く会話になっていなかった。
無駄な浪費は嫌いなんだ。むざむざ火山に突っ込ませるような話を許可しなかった、本来なら』
「……おらが、強硬的に決断したと言うだか？」
『――気でも変わったのか？
そちらでも確認できていると思うが、君たちネモフィラ一行は無事に……やはりな。
目的地付近まで辿り着いているじゃないか？』
――Ｃａｓｔｌｅ―０!!!!!!!!!!
ｍｅｓｓａｇｅ〟はいはい確認いたしますよ………ううん、参りましたね。〟
ｍｅｓｓａｇｅ〟私のログには何も残ってないのですが……〟
ｍｅｓｓａｇｅ〟いつの間にか正式な出国をしたことになってる書類が出てきましたよ？〟
ｍｅｓｓａｇｅ〟ネモフィラのサインもばっちり。これは言い逃れのしようもなく我々の動いた結果です。〟
――じゃ、じゃあここはどこなんだ……？
ｍｅｓｓａｇｅ〟火山が見えるので検索を掛けます……なるほど、燃料の減りも確かにそれくらいです。〟
『――では、ネモフィラ。今回ばかりは心にもないことを言うのは止めておく。
火山の頂上付近にある、古代遺跡を巡る抗争に進んで参加しに行くなんて狂気を、
まさか君が獲得するとは思ってなかったからね。
……………幸運を祈る。』
………こいつのこんなに心のこもった言葉を聞いたのは初めてだ。
それで、Ｃａｓｔｌｅ―０、ここは、どこだ？

message〟――リターニア王国です〟